



# “いのち”の 緩やかな連関

## 「存在知」としての自然農

文 = 村松知子<sup>まこと</sup>

### Profile

小学校教諭を経て、不登校児のフリースクールや教育相談に携わる傍ら、心理系大学院に再度進学し、臨床心理士となる。総合病院心療内科で震災後のこころのケアやストレス関連疾患の人たちのセラピーを行う。個人の内的世界と個をとりまく外的世界とのつながりに深く関心を持ち、現在は「いのち」が生き生きと育つ場」としてのコミュニティー作りに興味をシフトしてきている。

たのが、単にその人の「こころ根」が弱くて、そうした病になられた、というのではなく、近代社会が効率を重視しそれをあまりにも優先させるようになった結果、「いのち」が本来もっていたリズムを失ってその「ゆがみ」が「こころの病」として現れているのではないかとということだった。

「こころ根」が弱いのではなく、こころやいのちを育てていく土壌そのもの、環境そのものもはや「いのち」にとって生きつらく窮屈なものになってきているのではないかと、そんな思いがどんどん膨らんでいった。

そんな時にシャロムの畑と自然農に出会ったのだ。シャロムの土は、本当に黒々し

シャロムと出会ったまで都会育ちの私は「農業の宮み」というものとはまったく無縁にこの世界に存在していたし、ましては「自然農」というコトバすら知らずに生きてきた。

けれども、5月にシャロム畑のことを知り、そして「自然農」の講座に参加してから、雑草だらけの土地を見ると、もう無性に「このざり鎌」を持って草を刈り、種を蒔きたい…そんな衝動にかられている自分がいる。シャロムの雑草と呼ばれている草花（本当は「雑草」っていう草なんてないのですが）と一緒に野菜の芽が顔をのぞかせている風景を、自宅のマンションのベランダでほんやりと夜景を見ながらふと思いつきだけで、なんだか胸の辺りがざわざわしてくる。

自分とまさか「自然農」がこんなにリンクするなんて不可思議としかいいようがない。いったい自分に何が起きているのか…予期せぬ自分に出会った軽い戸惑いとそんな自分をどこかおもしろがっている自分がいて、今私は初めて「畑というもの」に出会ったような気がする。

これまでももちろん私は多くの整然と並び、耕された田んぼや畑の姿をいくつも目にしてきた。それがいわゆる「田んぼ」であり「畑」

シャロムと出会った時点で都会育ちの私は「農業の宮み」というものとはまったく無縁にこの世界に存在していたし、ましては「自然農」というコトバすら知らずに生きてきた。

けれども、5月にシャロム畑のことを知り、そして「自然農」の講座に参加してから、雑草だらけの土地を見ると、もう無性に「このざり鎌」を持って草を刈り、種を蒔きたい…そんな衝動にかられている自分がいる。シャロムの雑草と呼ばれている草花（本当は「雑草」っていう草なんてないのですが）と一緒に野菜の芽が顔をのぞかせている風景を、自宅のマンションのベランダでほんやりと夜景を見ながらふと思いつきだけで、なんだか胸の辺りがざわざわしてくる。

自分とまさか「自然農」がこんなにリンクするなんて不可思議としかいいようがない。いったい自分に何が起きているのか…予期せぬ自分に出会った軽い戸惑いとそんな自分をどこかおもしろがっている自分がいて、今私は初めて「畑というもの」に出会ったような気がする。

これまでももちろん私は多くの整然と並び、耕された田んぼや畑の姿をいくつも目にしてきた。それがいわゆる「田んぼ」であり「畑」

であり、「正しい田舎の風景」のように思っていた。一方、シャロムの「自然農」の畑はそれとは異なる情景だ。お行儀のいい畑に囲まれてそれはあるのだが、一見すると単なる「雑草だらけのいかげんな畑」にしか見えない。けれども、シャロムの白井さんと講師の館野さんのお話を聞くと、同じ畑なのにそれはこれまでとはまったく異なる表情を現し始める。そこで私が出会った畑は「雑草」といういわば「敵」や「他者」を排除するのではなく、それらと「共生」し、「調和」しながらそれぞれの「いのち」が緩やかに連関しながら存在し合っている「そんな畑であった。

この畑にすべての「いのち」のあり様のヒミツが隠されていたなんて！自分のまさに「足元」にその「答え」はあったんだ！そんな気がした。

——実はこの数年間、私はずっと問い続けていたことがあった。それは今の私の職業と密接に絡んでいるのだけれど。

——私はいわゆる「こころの専門家」と呼ばれる仕事をしていて、日常ではストレスなどが原因で心身に不調をきたした方々のサポートをしている。そしてそのような方々との数多くの出会いを通して感じるようになっていたが、「自然農」は私にとって単なる「農法の一技法」ではなく、人間存在、ひいては「いのちそのもの」のあり様にまで迫ってくる確かな「存在知」である。

**【自然農とパーマカルチャーとの関連】**

パーマカルチャーは持続可能な農的暮らしのデザインです。特別な農法はありません。一般的にはオーストラリアでは有機農業、バイオダイナミック農業などが盛んです。パーマカルチャーは自然農なども包括する概念です。

分断して競争させる、資本主義の競争の原理に人間も飲み込まれています。引きこもりも登校拒否、自殺願望も自分のせいではなく社会のしくみの結果であるかもしれません。むしろ、繊細な気持を持っている人ほど社会にとけ込めないのです。そろそろしくみを変えていく必要があるのでしょう。分断して競争させるから、融合して共生する。略奪的な農法から、草も仲間とする農へ。奪い合う暮らしから、与え合う暮らしへ。社会は今変革の時に来ています。人間が作り出したしくみは人が変えられます。(ケン)



# 発展とは何か ラダックから学ぶこと

「懐かしい未来へ」ホームページ  
<http://www.adf.jp/>

写真協力：北原芳恵

「発展とは何か」ラダックから学ぶこと」のビデオ上映が行われました。ラダック（インド最北部ジャムム・カシミール州）は、ヒマラヤ山脈の西側、標高4000メートルの高地に位置し、チベット仏教が篤く信仰されています。ラダックの人びとは地域社会の絆の中で助け合い、自給自足の簡素な暮らしを営んでいました。

しかし、やがてここにも「開発」「発展」の波がやって来ます。ビデオでは、伝統的な社会に襲いかかった近代化の影響により、人びとの暮らし、価値観が変化する様子が描かれています。ラダックの文化と環境が崩れていく様は、「進歩」とは何か、世界の「貧困国」における「開発」、「先進国」の「発展」のあり方について考える契機となりました。ラダックの例は、環境や社会、そして私たちの精神の諸問題、根本的な原因について示唆してくれるだけでなく、私たちの未来についても貴重なガイドラインを与えてくれます。

題材はヒ

## 発展がもたらしたもの

ラダックに大きな道路が通り、「発展」という概念が持ち込まれ、物質的には豊かになったものの、伝統的価値観を失わせ、コミュニティの崩壊を招きました。政府から送られてくる物資に、次第に人びとは依存し始めます。官僚的な分配は、いざこざを引き起こし、上下関係を意識させたり、劣等感を感じさせました。家族や地域の人に頼るよりも、お金に頼ります。「調和の文化」が失われ、犯罪も増えました。

かつては、全てを自然の恵みから得、その調和の中に生き、「ゴミは自然に還っていくものでした。今はトラックの排ガスとゴミが溜まってゆくばかり…。『時間の流れ』も変化しました。これまでは余暇に多くの時間を費やしていましたが、開発は生活のスピードを速めました。

子どもたちは、親の暮らしを見たり、感じたりしながら、伝統的な生活の仕方を学んできましたが、今は、経済社

マラヤの山村ですが、現代の日本、そして自分をもう一度見直したいと感じさせる映像です。

## レポートⅡ 渋谷正和

1978年埼玉生まれ。渋谷有機農園運営。農業を使わない、自然の力ですくすく育った「生きる」って味がする野菜づくりを実践。

## ラダックの伝統的な暮らし

ラダックは、近年、急速な発展を遂げました。物質的に豊かになった反面、自然環境の破壊、コミュニティの崩壊が進んでいます。「人間関係がギクシャクして、バラバラ」、「農業をする人がいなくなってきた」、「昔よりも豊かでないような感じがする」と、ラダックの人びとは話します。

ラダックでは、これまで90%以上の世帯が、1.2x1.6ヘクタール程度の土地を持ち、家畜を飼い、自給自足の生活をしていました。また、泥でレンガを作り、自分で家を建てること



できました。人びとは、「すべてのものは、相互につながり合っている」ことを理解し、木、石、土、水…も、配慮されて使われていました。それは「生産を増やし、天然資源を破壊する」近代とは違う文化でした。それを維持していたものが、「相互扶助の関係」と「地域に根差した技術」です。

収穫期には、親族や近所の人が集まり、農作業を手伝います。互いに収穫期が重ならないように気を配ります。手伝ってもらえば、食事でもてなし、農作業を手伝い返す。そこにお金は介在しません。そして、収穫が終わると、コミュニティ全体で、一週間くらい「踊り、歌い、笑う」祭りが続き、宗教的儀式が行われます。

豊かな環境と「コミュニティの一員として生きる」という精神、大きな輪の中で生きていることが意識されている社会。時間をかけて築かれたこうした伝統文化の中に、持続可能な暮らしや生きるための知恵が備えられていました。

# ヘレナさんからのメッセージ

ヘレナ招聘残念会(2003年)のビデオ上映会で紹介した、ヘレナさんからのメッセージを皆様に送りたいと思います。私自身が、このラダックの活動を通して大事にしていることは、開発や発展のその前と後の状況をのみ比較することではなく、ラダックのたどる道を、仲間たちと考え、悩み、そして、これから、私たちはどのように生きていくのかを決めるための素地を作っていくことだと思っています。(加賀美思帆)



『ラダック 懐かしい未来』  
(山と溪谷社)

## ヘレナ・ノーバーク・ホッジ



ISEC (エコロジーと文化のための国際協会。本部イギリス) 代表。スウェーデン生まれ。言語人類学者。1975年にラダックに入り、ラダック語・英語辞書を作成。1986年、持続可能で公正な地球社会実現のために斬新で重要な貢献をした人に与えられるライト・ライブリフッド賞を受賞。著書『ラダック懐かしい未来』は40カ国に翻訳されている。ラダックでの活動を継続しつつ、グローバリゼーションに対する問題提起や啓発活動を行っている。ISECのホームページ <http://www.isec.org.uk>

皆さんは、懐かしい未来のビデオ「発展とは何か」ラダックから学ぶこと」をご覧になったと思います。このフィルムで表現されていたほど状況は暗くないということ、強調しておきたいです。というのは、ラダックです。すでに始まっていたさまざまな自主的な取り組みを、撮影の時に含めることができなかつたからです。

ISEC (エコロジーと文化のための国際協会) の支援を得て行われたその取り組みは、グローバル経済の破壊的なインパクトに対抗しようとして、ラダックの自立と誇りを強化しようとするものです。これらのプロジェクトの多くは大変効果的で、特に西欧の消費文化がラダック独自の文化に優越するものではないということ、したがって、自分たちが劣っているとか遅れているとか貧しいとか感じる必要がないのだということ

とを、ラダックの人たちが理解することができたのは重要だっただけです。

このような取り組みの中でもっとも重要なのはラダック女性連合(Women's Alliance of Ladakh = WAL)で、これはISECが1990年の立ち上げを支援しました。この団体の主な目標は、ラダックの精神のおよび環境的価値や、農の営み、遅れていて劣っていると思われる田舎の女性などを重視し、強化することにあります。WALは現在100以上の村々に6000名ほどのメンバーがおり、ラダックでももっとも力強い運動となっています。

ISECはまた、「リアリティ・ツアー」というのを行いました。ISECがスポンサーとなって、約30人のラダック人が西欧を訪れ、自分たちの目で何がどうなっているのかを

会で生きるための専門的知識を学校で学び、伝統的な価値を学ぶ余裕はほとんどありません。そこには、セーフティネットがなく、落第したものは、近代システムから排除され、伝統的な生活に戻ろうとも、その仕方もわからなくなりました。

また、女性は、農の現場に残され、ひとりでも多くの仕事をこなします。以前は、親族ないしはコミュニティで支え合っていたことも、ひとりで対処しなければならぬのです。

ラダックの人びとが「西欧文明への憧れ」を抱くのは、外から来る旅行者のふるまいも大きく影響しています。ラダックの人びとがようやく貯める財を、旅行者は一日で使う…、それが西欧文明の豊かさのイメージを増幅するのです。その結果、富は、購買力、財の蓄積に移り、伝統的な価値である自給率ではなくなりました。

### ラダックから学ぶこと

「発展」は、短絡的には物質的な豊かさを与えてくれたように思われますが、長い時間をかけて築いてきた伝統的な豊かさを失いました。これは、第三世界で起こっている問題ではありません。西欧社会も同じで、産業革命以降、少しずつ変化したために、ラダックのような急速な変化が見えにくいだけなのです。

知恵とは、将来的な視点で物ごとを見ることのできる体系的な能力です。専門的な知識ではなく、知恵を持って、もっと生態系やコミュニティ、家族、地球とのつながりを取り戻すように生きること、「つながり合って生きているのだ」という意識を持つこと。これが、ラダックから僕たちが学ぶことではないでしょうか。そしてラダックに起きたその原因は、僕たちの暮らしに無関係ではない、ということなのです。

## 安曇野パーマカルチャー塾2期メーリングリストより

東京の上映会で見逃してしまったビデオを観ることができて良かったです。それからヘレナさんからのメッセージを紹介してくださって思帆ちゃんありがとう。思帆ちゃんから提案の「新ビデオの出資」の話ですが、(パーマカルチャー安曇野塾2004)で、1口出資したらどうだろう、と思いました。もちろん、個人で1万円の出資でもいいですが、無理のないところで、ひとり1000円とか500円でもいいんじゃないかな。新ビデオはシャロムのライブラリーに預かっておいていただければ、ここへ来た人にも伝えられるので。PS. 新作ビデオが完成したら上映会をやりましょう。また思帆ちゃん解説してくださいね。(あみ)

～後日談～ビデオが完成して安曇野塾メンバーの多くの名前と安曇野パーマカルチャー塾の名前がテロップに流れました。ここにもつながりを感じました。(ケン)





自給自足

# 私の子ども時代

話＝三浦久美子



私は、秋田市と本荘市の真ん中に位置する由利郡岩城町（現・本荘市に吸収合併）。亀田という集落にある峠の村で生まれました。村にはよろず屋が1軒、民家は42軒、全員が顔見知りです。バスも通っていない小さな村ですから何をすることも最低1時間は歩かないと用が足せません。町へ出ても、電車は1時間に1本とのんびりしたものです。東京から遊びに来た友だちが、「日本昔話に出てくる村みたい」と言っていました。

私が高校生の頃（30年前）までは水道もなかったの、山からの湧き水、井戸での生活でした。真夏の水不足は大変。母は、湧き水をバケツに汲んで運んでいました。当然、洗濯は川。夏休みの私たちの遊びも、もちろん川でした。

山をひとつ越える学校までの5キロの道のは、小学生の足では2時間かかります。特に冬は大変。雪が積ると道がなくなってしまいますから、先頭を歩く子の足跡通りに歩きます。外に出る時には祖父が獲ったムジナの毛皮を羽織りました。

毎朝6時に家を出ます。夏はフキの葉をコップにして沢の水を飲んだり、食べられる草花を採ったり、学校に行くまではちょっとしたハイキングでした。ハウの葉に包んで持たせてもらったきな粉ご飯がおやつです。

木々の間をムササビが飛んでいます。キツネが出るかもしれないから、坂道はひたすら走りました。そのお陰か？マラソンは強かったです。あの頃の生活が今の私の健康のもとになっているような気がします。

祖父は、川でイワナやヤマメを釣ったり、山

菜や山芋採りの名人でした。炭焼きをしたり、道具も手作り…、何でもひとりでやってしまう人でした。祖父が捕った野うさぎを、私はかわいがっていたのですが、学校から帰ると、壁に張付けにされていて…。

私は祖父の話が大好きでよくせがんで聞かせてもらいました。オオカミが乳飲み子をくわえて持って行く話とか、結構、怖い話が多かった。村に、馬の仲買商人がたまに来るのですが、私はそのおじさんをキツネが化けていると思ひ込み、山道ですれ違う時に、（キツネは犬が嫌いだから）「ワン！」と犬の鳴きまねをしていたほど（笑）です。

父は7代目の農家。はだか馬に乗って田んぼ仕事をしている父の写真が残っています。私の両親は、傘や長靴まで修理して使っていましたし、山菜採りのカゴも手作りです。寒さ除けの囲いもススキで組みます。お米、野菜。それから、味噌や醤油。手作りでできるものは全部家で作っていました。放し飼いの鶏の卵を食べ、毎朝ヤギのミルクを飲んでいました。あの濃い味を今でも覚えてます。兄は農業を継がず、サラリーマンになりました。今実家では、自分の家で食べる分だけの野菜を作っているだけです。

母に、「ネコのゴローは元気？」と聞いたら、「田んぼのあぜ道でテン（イタチ科）を追いかけているくらい元気だよ」と言われてびっくり！ たくさんの山の動物たちがヘリコプターからの農業散布で姿を消したようですが、減農薬の実施で動物たちがまた増えつつあるようです。

のです。特に、農家と消費者をつなぐコミュニティフード運動は、社会的にもエコロジカルな意味でもたくさんメリットがあります。世界経済がじわじわと私たちがむしばみ続ける中、こうしたプロジェクトは有意義な変化を引き起こすことができます。しかし、個人やコミュニティのレベルで行動するだけでは不十分です。WTOや国際通貨基金、世界銀行、それにアメリカ政府の先導によって、企業が残りの世界に対して不公平で持続不可能な開発を押し付け続ける限り、地球温暖化や有害化学物質、生命体の遺伝子操作、社会や政治の不安定さ、人種差別、それにテロなどの問題は、全て増え続けるでしょう。私たちはこのプロセスを見抜いた以上、経済のグローバル化の進行に抵抗するために何かをする責任があります。

私たちにできるもつとも重要なことは何でしょうか？ ISECとしては、情報や教育を提供し、意識の向上をうながし、そこからメッセージを引き出してもらうことだと考えています。残された時間は短いので、市民運動的なやり方で早急に誰もが自分の時間のうちいくらかをこの活動に費やしていくのです。エキスパートである必要はありません。ビデオやニューズレターや本を、体系的にきちんと渡していくだけでもいいのです。あるいは、こうした問題について10人の友人に話し、さらに彼らが同じようにしてくれるように頼むこともできます。持続可能なやり方を明確に打ち出し、どうやってそれに至るかを考えるには、グローバル経済を全体的に深く理解することが必要です。そして今以上に、社会のより多くのセクションの

## グローバルからローカルへ

ヘレナさんを招聘（2006年：ヘレナさん招聘実行委員会）し、「グローバルゼーションからローカルゼーションへ」をテーマに3日間のシンポジウム&講演が行われました。その中でヘレナさんは、しあわせの指標を求めると、ローカルゼーション（地域主義化）に行き着くと言いました。「地域経済が、コミュニティに属する感覚や自分とのつながりをもたらしてくれます。自然界とのつながりを取り戻してください。今よりも必ずしあわせになることを保証します。幸福の経済に向けて動き出してください。それが懐かしい未来に向けての筋道だと私は考えています」



ヘレナさんが代表を務めるISEC 発行の『食と農から暮らしを変える、社会を変える～行動のためのヒント集』（日本語版 NPO 法人開発と未来工房、64 ページ 500 円）

人ひとの参加が必要です。現実には継続的な変化を起こすためには、環境運動や社会運動が経済の変革に関わっていく必要があります。自分の時間やお金を、世界の状況を改善するのに費やそうという思いを持った心ある人たちが全員が関わってゆくのです。どんな活動であれ、社会や環境の病を癒すために行動する人たちが、はつきりと経済の根

本的な転換の必要を理解できたら、現実に変化の可能性が生まれるでしょう。もし、イラク戦争に反対して行進した5000万人もの人たちがこの経済の変革に加わり、貿易政策の転換、成長という概念の見直し、そしてこれまでと違う政治のしくみを要求したら、流れは変わり始めるでしょう。

# コミュニティ経済による 持続可能な循環型 地域社会の創造

話|| ジル・ジョーダン



## Profile

1978年オーストラリア・マレーニでコミュニティ再生活動を展開。オーストラリア初の地域通貨レッツ、クレジットユニオン他、多くのコープ(生活協同組合)を設立。地元文化の継承・発展を地域経済発展のキーポイントとし、国内外でファシリテーター、コンサルタント、ワークショップや会議のプレゼンテーターとして活躍中。

レポート=丸田哲也

## 協同組合ホールフードショップ の設立

私たちは1970年代に、都市からマレーニ(クイーンズラン州南東部)の田舎町へ移住して来ました。マレーニという場所は、かつては緑に覆われていましたが森が伐採され、酪農が営まれていました。その酪農も近年の厳しい市場競争に対応できず、下火となっていました。

この地では、私たちが必要とするものが売られていませんでした。そこで私たち6名は、ホールフード whole food(白米ではなく玄米、白い小麦粉でなく全粒粉など精製されていないもの)を量り売りで買えるよ

うな店を作りました。私たちにはビジネスに関する経験がなく、大きな決断でしたが、どのような形で店を運営するかということが、課題となりました。6名が共同購入するという形もありましたが、町全体に恩恵が及ぶ形にはなかったのです。

仲間のひとりのアメリカ人女性が米国で行われていた協同組合(コープ)に着目しました。特定の人が運営に関わるのではなく、会員が組織運営に関わります。これは私たちが目指していた運営形態にふさわしいと感じ、1979年に設立しました。この協同組合では、ホールフード以外に各自が作った生産物も販売しました。

協同組合を立ち上げた当初は、昔から住

もなりました。

設立からしばらくは交替で助け合いながらボランティアで運営されていましたが、少しずつ軌道に乗り、現在は13人の有給スタッフによって運営されています。当初から続く変わらぬ理念があります。地元生産物を優先する。オーガニックである。環境に負荷をかけない。会員のニーズを常に意識することです。

## ポリシーを持った 銀行クレジットユニオン

その後、タスマニア出身のビル・モリソンが、米国で行われている社会的責任を配慮した金融システム(日本では社会的責任投資 SRI が近い)を学び、報告会を開きました。景観がよく自然豊かなマレーニには新しい住民が入ってきますが、金銭的に余裕のある者は少なく、また、既存の大手銀行では融資できない低所得者が多かったのです。そこで、米国の事例に倣って地域に根差した銀行を作ってはどうかという案が出されました。地域密着であること。

環境に考慮すること。収益や融資対象となる案件は地域に便益を還元すること。これらのポリシーを持った銀行の設立です。勇氣ある決断でした。なぜなら、金融で働いた経験やそのノウハウを持った人間がいなかったからです。

しかし、地域に貢献するために融資を受けられる地域銀行が必要だという気持ち、熱意が大きく、9ヶ月後にクレジットユニオンと呼ばれる地域銀行を設立しました。キャッシュフローの維持が課題となりますが、金融業は、預金を集め、そのお金を貸せば金利がつき、金利は運営資金としてすぐに使えます。担保はありません。最初は一部屋だけを借り、スタッフもボランティアでした。現在では豪州でもっとも成功したクレジットユニオンとなりました。

パーマカルチャーの理念に基づいて建設されたエコビレッジ「クリスタルウォーターズ・パーマカルチャー・エコビレッジ」の資本金もクレジットユニオンの融資です。400以上のコミュニティ・ビジネスがクレジットユニオンから生まれました。クレジットユニオンの利益は、組織のた

むマレーニの人びと(多くは酪農家)に懐疑的な目で見られていましたが、次第に地域の人たちが理解を示すようになりました。商品を渡す際、リサイクルのビニール袋やジャムのビンなどを利用していました。そのことが、地域に昔から住むお年寄りの目に留まり、家庭で余った容器を「商品を渡す時に使ってください」と店に持って来るようになり、新住民と地元住民の垣根が少しずつなくなりました。そして、誰でも販売できるようにすると、地域の人びとには、家で余った野菜や果物を持ち寄るようになりました。これは、町内の年長者と若者のつながりをつくるきっかけにもなりました。また、情報提供や情報交換の場

めではなく地域のために使われます。ソーラーパネルやコンポストトイレなど、環境に配慮した家を建てる等の場合は、金利を安くしています。こうしたことをすることにより、銀行としても環境を考慮した活動をしていることになりました。また、黒字の10%は地域に還元(小学校の改装等に補助金を出す)しています。さらに、特定のメンバーの間で資本を集めて、プロジェクトを実施するマイクロクレジットに対しても、出資をしています。

クレジットユニオンの事業報告は、3つの側面から行っています。会計報告。地域社会との関係に関する報告。そして環境報告です。この事業報告は2000年から始め、現在では大手の銀行も採用しています。

## 地域通貨 LETS

うまく行っているように見えたクレジットユニオンですが、事業を進めていくうちに新たな課題が浮き彫りになりました。それは、所得のある人は預けたお金の利子によって利潤を得ますが、所得の少ない人

は利子の恩恵を受けることができない。所得格差は開く一方だということです。そこで、私たちは、カナダで行われているLEETS(地域通貨)を実施することにしました。LEETSの導入により、お金を持たない人たちが経済活動に大きく貢献することになりました。

これまで紹介したホールフードショップ、銀行、地域通貨の立ち上げの後、マレーニの町にはさまざまな協同組合が登場しました。地域に密着し、環境に配慮し、地域に貢献、還元するなど、倫理的なポリシーをもって運営されています。現在、地域の生活向上に関する事業や、雇用、水質等の環境保全、教育や文化、メディア等のさまざまな協同組合があらゆるサービスや物資を提供しています。複数の協同組合に属する人も多くいます。

## 成功のための ゴールデン・ルール

こうして成長してきたマレーニには多くの人びとが視察に訪れます。なぜマレー

ニで、それらを活かし、補い合うことが必要です。

さらに、対話の機会や場所作りを怠らな  
いでください。新組織の立ち上げの際にも  
ちろん、既存の組織にとっても重要です。  
対話の機会を設けることで、組織に隠れて  
いた歪みを見つけることができます。対話  
の場所や機会作りは、町の人やメンバーに  
「助けがほしい」と言える良い機会ですし、  
同時に誰もが役に立てる良い機会ともなり  
ます。  
最後は、どんなことも常に皆さん自身が  
楽しんで喜びを感じて進めていくくださ  
い。地球のために、それぞれのビジョンの  
ために協力し、インスピレーションを感じ、  
喜びを感じることが大変素晴らしいこと  
だからです。

以上、さまざまなことを申し上げてきた  
ましたが、マレーニは特別な町ではありません。  
皆さんとの違いがあるとすれば、25年  
間の模索の経験だと思います。地域の課題に  
対して、全員で取り組むことの重要性を最  
後にお伝えして、私からの話を終わりにし  
たいと思います。

ニの試みがうまく行っているのかと尋ねら  
れ、振り返ってみると大切な法則があるこ  
とがわかりました。私たちはこれをゴール  
デン・ルールと呼んでいます。何も田舎の  
コミュニティづくりだけではなく、国づ  
くりや地球規模のプロジェクト、商店街等、  
全てのことに応用できます。

まず、小さく始めましょうということ  
です。最初から大きなことをやろうとすると  
失敗する可能性も大きくなります。足元か  
ら小さく始めてください。立ち上げに必要  
なエネルギー(人力、技術、資金)はす  
べてあるものを使うことです。お金を借りる  
といった無理はしないでください。無理を  
すれば、最初に持っていたエネルギーが小  
さくなってしまいます。

たとえシンプルなことであっても、ニ  
ズを確認することを忘れないでください。  
素晴らしいアイデアであっても必要とされ  
ていなければ成功しません。そして、これ  
から実践しようとしていることをすでに経  
験している人から学ぶことです。同じ志を  
もった仲間ですから教えてくれるでしょう。  
さらに、プロジェクトや組織作りに関わ

## 教えて！ ジル・ジョーダンさん

### Q マレーニの主な産業は？

A かつては、酪農に代表される農業が主  
要な産業でしたが、現在、農業の割合  
は10%程度。現在は、協同組合が主な経済主体  
で、約25%は個人事業者。そのうち10%は音楽  
や美術など、芸術や芸能に携わる人たちです。  
また、観光も伸びています。30年前と比較する  
と、マレーニの産業は多様化しています。

### Q 人口などの指標に基づいた場 合、町が抱える課題は何？

A 人口増加は、町が抱えている課題のひ  
とつです。マレーニには、新住民の受  
け入れを担う協同組合があり、新住民に積極的  
にアプローチしています。その住民をよく知る  
ことが大切と考えています。

るメンバー間で、ビジョンや目的を共有し  
てください。確認・合意したことは、それ  
を常に維持しないといけないわけではなく、  
状況に応じて変わっても良いのです。重要  
なことは、メンバー同士が常に共有し合うこ  
とです。そして、全ての人を受け入れ、仲間  
に入れてください。常に新しい変化やニ  
ズに敏感であるためには、いろいろな意  
見、人を受け入れるという体制が必要です。  
オープンな姿勢でいること、それをメン  
バー全員が意識するようにしてください。

また、組織の中でメンバー同士がお互  
いをトレーニングし合うことです。組織維  
持に必要なスキルはもちろんです。メン  
バー同士が良い関係を保つトレーニングを  
忘れないでください。いかに効率的に、ま  
た、楽しく、しあわせを感じながら良い関  
係を築いていくための方法を模索し合う。  
人間関係の問題が起こった時、平和的な解  
決をする。

ボランティアの価値や貢献は無視されが  
ちですが、彼らの重要性を認識することが  
必要です。プロジェクトをスムーズに進め  
るためには、各自の得意や興味を確認した

### Q LEEDって何？コンサル ティングによる変化は？

A 1997年にマレーニでフォーラムを  
開催した際、協同組合の立ち上げを支  
援する組織の必要性を強く感じました。そこで、  
既に協同組合を設立して順調に運営している住  
民5名が集まり、自分たちの組合の成功要因  
を探りました。また、うまくいかない場合の要  
因についても住民にヒアリング調査を行いました。  
それらの調査をもとに、マーケティングや  
資金調達等の経営に必要なあらゆるスキルのト  
レーニングを行いました。その結果できあがっ  
たのがLEED(Local Economic and Enterprise  
Development Cooperative)という地元経済発  
展のための協同組合です。主に協同組合の事業  
経営のコンサルティングを行います。コンサル  
ティング料はLEETSやパートナー(野菜など)  
の物々交換、また、その協同組合が提供でき  
るサービスでも受け入れます。こうした既存資  
源以外の報酬の受け取りを可能にすることで、  
相手の熱意を損なわずに支援できるのです。  
新しく事業を始めたり、拡大しようとする人  
を支援し、アドバイスすることをメンタリング  
と呼んでいます。最低一年は、毎月メンタリン  
グを受け入れることが条件です。従来は一年間

に立ち上がった協同組合のうち8割が赤字でしたが、メンタリングを取り入れたことによって、最初の三年間のうち、約85%が成功するようになりました。すると、州政府の目に留まり、補助金が出るようになりました。補助金によって、メンタリングの料金を安くすることができ、さらに多くの組合にメンタリングを行うことができます。これは、地域と行政と協同組合の素晴らしい関係のひとつです。この助成措置によって、従来、行政や商工会が行うはずの支援措置の10分の1のコストで起業家支援ができるのです。今やLEEDはマレーニの町の発展にとって画期的な活躍をした代表的な組合になりました。

### Q メインストリート周辺の住宅街の整備主体は？

**A** メインストリートの住宅は個人によって整備されたものです。協同組合によって整備された住宅もあります。最近では町づくり全般について、住民への啓発が進み、住民も積極的に関わるようになりました。人口が増えてきたため、スーパードなどの大資本の進出が問題になっていきます。マレーニにも、ウールワースという大型スーパーの進出が1999年に計



マレーニの町並み

画され、残念なことに、市から許可が下りてしまっただけで、環境保護等の観点から反対を行っているためか、建設工事は始まっていません。これは今後も予断を許しません。

### Q 協同組合運営の成功理由は？

**A** 既にマレーニには、協同組合があり、基礎的理解ができていたと考えています。例えば、週末だけ開園する幼稚園が、80名の男女による協同組合として、1940年頃に存在していました。男女各40名で構成され、男



クレジットユニオンのオフィス

写真協力：山田貴宏

性が食事の準備を担当していました。また、私たちが最初の協同組合を立ち上げる前に、入念な調査をしたことも、成功の理由でしょう。既存の資源（エネルギー）活用はとても重要です。特に、パイオニアの時期は個人の負担など、大変な努力が必要とされます。それがあって現在の成功があると考えています。

### Q LEETSはどのように使われるのですか？

**A** シンプルな地域通貨です。ある理念に基づいて取り引きが行われ、価値がその場で生まれます。LEETSの創始者マイケル・

リントンは、LEETSの理念として、自己啓発、自分の力を生み出すことの重要性をあげています。マレーニのLEETSの始まりは、市民の声からです。掲示板でLEETSへの参加の呼びかけを行い、オフィスを作りました。オフィスではLEETSへの新規参加者に対して、取り引き方法の説明を行い、その参加者のニーズを丹念に聞きます。例えば、参加者が歯医者へ行きたいという場合、オフィスの担当者が歯医者へ行き、そこでLEETSを受け入れてくれるように、交渉を行います。「このLEETSを受け入れることで、LEETSのメンバー全員があなたの顧客になります、いかがですか」と。このLEETSによって、会員は余分な現金を使わないようにできるのです。

誰もが自由に訪れるオフィスがあるのはとても良いことです。参加者のニーズにすぐに対応することができるからです。また、直接顔を合わせることも重要です。

LEETSには、さまざまな表現があります。そのいずれもが頭文字は地域（ローカル）で、地域に根差すという理念があります。私は地域というのは、髪の毛を切りに行く範囲だと考えています。そのような範囲において、豪州では各地でLEETSが実践され、東海岸でも300のLEETSが存在します。これらの

### Q クレジットユニオンや、マイクロクレジット、LEETSのシステムの違いは？

LEETSは連携されており、それはインター（Inter）LEETSと呼ばれています。このインターLEETSのスタートも会員のニーズから始まったものなのです。

### A

このようなクリエイティブなアイデアは、既存のシステムに力がないことの結果です。マレーニでは法的に認められている



協同組合のオーガニックショップ

融資のシステムとして、クレジットユニオンを実践しました。コミュニティにふさわしいシステムですが、政府の管理下にありません。クレジットユニオンに対しては、誰でも投資できませんが、融資は地域住民に限られます。一方、マイクロクレジットは同意した同士の資金を融通するしくみです。さらに、パートナーといったシステムがあります。このシステムでは一切の記録はありません。LEETSは、通常の貨幣を伴わずに、誰かが管理することなく、双方が合意した価値で交換が成立します。

以上のそれぞれの異なったしくみを説明しましたが、マレーニでは相互に関係があります。例えば、LEETSのオフィスは、クレジットユニオンのオフィスに間借りしています。LEETSはそのオフィスの賃料を、LEETSでクレジットユニオンに支払っています。クレジットユニオンがLEETSを受け取るのには不思議に感じられるかもしれませんが、しかし、クレジットユニオンのオフィスでペンキ塗りが必要になった場合、LEETSであれば、プロでなくとも、ペンキ塗りが好きな人に雇用を与えることができます。これによって、無用な現金資源（エネルギー）の使用を防ぐことができます。この金融システム同士のネットワークは、パワフルな地域作りのキーだと考えています。

## コミュニティ経済による持続可能なコミュニティづくり

# コミュニティ銀行と コミュニティ通貨

文 = 糸長浩司



### Profile

日本大学生物資源科学部生物環境工学科教授。建築・地域共生デザイン研究室。NPO 法人パーマカルチャー・センター・ジャパン代表理事。専門は環境建築、エコロジカルデザイン、パーマカルチャー。日本各地の農村地域での住民参加型むらづくりの実践的研究、世界のエコ建築、自然エネルギー、エコビレッジ運動研究。主な著書に、『2100年未来の街への旅』（共著、学習研究社）、「コミュニティ経済による持続可能なコミュニティづくり ARDEC29号」、『地球環境建築のすすめ』（編著、彰国社）、『地域環境デザインと継承』（編著、彰国社）などがある。

先進諸国、第三諸国を問わず、都市および農村地域の再生は、単なるハードなインフラストラクチャーの改造ではなく、社会、コミュニティの再生がポイントである。サステイナブルコミュニティをどう構築するか。コミュニティ・キャパシティ・デベロップメントのためのコミュニティ経済をどう構築するかにある。大切なことは環境、社会、経済の三位一体的で持続性の高いシステムをコミュニティで構築すること。本稿では、豪州の小さな町マレーニでの試みを主に紹介しながら、オルタナティブなコミュニティ経済のあり方について展望する。

### マレーニ町での 多様なコープ活動

1970年代に豪州プリズベン北部の小さな町マレーニに、シンブルライフを求めて移住してきた都市住民たちによって、後に、世界的に有名となる新しいコミュニティ経済が開始された。当時の町は貧しく、うらさびし牧畜農業地域で、新住民たちが必要とした全粒粉等の有機農産物が入手できる店はなかった。そこで、有志

が集まり、共同購入から始め、コーポの店を始めたのであった。コープでは、ビンや袋のリサイクルを心がけたことで、地域の婦人たちの共感も得、次第に地域の農産物も扱うようになり、地域経済の一翼を担うまでに発展していった。

マレーニは、1990年代に多くの協同組合的組織を立ち上げてきた。町のゴミリサイクルセンター「リサイクル・コーポ」、荒廃した土地の再緑化を支援する「バラング・ランドケ

ア」、女性たちのスキルトレーニングのための「マウンテン・フェア」女性啓発コープ、パーマカルチャーの理論に基づく世界で初めてのエコビレッジ「クリスタルウォーター・パーマカルチャー・エコビレッジ」、人道主義をベースとした子どもたちの教育機関「リバー・スクール」、町のパブ的クラブ「マレーニ・コーポラティブ・クラブ」、地元芸術家たちの作品販売「ピース・オブ・グリーン」、映画観賞「マレーニ・フィルム・ソサエティー」、町の情報発信交流組織としてラジオ「マレーニ・コミュニティ・ラジオ」、町のテーマ性の高い話題を取り上げ話し合う「マレーニ・コミュニティ・フォーラム」等である。これらの地域住民のニーズに基づく多様なコープづくりは、その後のマレーニでの町づくりの骨格となった。

### コミュニティ銀行 (クレジットユニオン)

マレーニでのコミュニティ経済の機動力になったものに、クレジットユニオンの設立がある。パーマカルチャーの提唱者ビル・モリソンから、米国での倫理的投資法の話聞いた前述のコープ役員たちが、お金を地域で循環させるためにクレジットユニオン（コミュニティ銀行）を1983年に立ち上げた。当初は、5・3万ドルの資金であったが、2002年には1500万ドルと300倍に拡大し、自社ビルを持つまでとなった。

メンバーは6000人。町に230種の雇用を創造し、110件ほどの新ビジネスを創出してきた。パーマカルチャー・エコビレッジのクリスタルウォーターの設立資金援

助、他の協同組合活動の支援、環境保全再生活動への資金援助等を継続的に行っており、クレジットユニオンが得た収益の一部は、助成金として、地元の学校、病院、環境グループに授与され、まさに、コミュニティの中の活きた金の循環媒体としての役割を果たしている。

また、クレジットユニオンの会計報告は、トリプル・ボトム・ライン（三本立て会計）で、収支報告だけでなく、町への環境的な功績、社会的な貢献に対する評価のエコ会計報告が実施されており、地域コミュニティ銀行として公平な評価がされるしくみとなっている。

ユニークな試みとしては、銀行内の紙の減量策として、紙を使用する量に応じて、先の「バラング・ランドケア」コーポに「エコ税」を払うというものがある。

### コミュニティ通貨 (LETS)

クレジットユニオンは、市場資金を取り扱う銀行の一形態であり、その限界は、お金を持っている物だけが得をするシステムであることだ。クレジットユニオンにお金を預けられない貧乏人は相変わらず貧乏なままであり、銀行から融資されても利子を返すことで苦労する。クレジットユニオンだけではコミュニティ内の貧富の差は解消されない。

そこで、日本でも近年盛んに試行されている地域通貨が導入された。1982年にカナダで始まったコミュニティによる自らの地域の財やサービスの交換システムLETSローカル・エナジー（エックスシステム・トレーディング・システム）で、1987年に導入された。

LETSはお金を持っていない人たちが自由に参加でき、自らの持っているもの、特技、できることを持って、交換できるしくみとして発展した。低所得者層にとっては有効な手段であり、かつ、交換に際して相互に価値を決めることで、人びとの持つ価値を相互に認識し信頼し合う関係が成立する。ここにコミュニティが生じ、経済的価値だけでなく、社会的価値、社会的恩恵をコミュニティに生むことができた。コミュニティツールとしての役割が大きい。

コミュニティの市場に雇用を生み出す資金としての金があれば、失業は増加する。しかし、一方で、地域コミュニティにとってすべき仕事は多くあり、かつ、それぞれの分野でその仕事をできる人たちが多くいる。それらをつなぐ道具として

た時点で400近くのLETSの組織があり、1994年頃から急激に伸びている。当初は、環境問題等に関する中流階層の遊びのような点があったが、その後の広がりは、地域の自立のための新しい地域経済、低所得者層の生活安定化のための道具としても拡大してきている。LETSの活動状況を分析した『LETS ACT LOCALY』(1998年、ジョサン)では、LETS組織の構成メンバーの4は失業者であり、マンチェスターLETSは43%、キングストンのサーリーは50%、ペンブロークシアアのハンバーホードウエストでは70%であるという。彼はLETSの利点として、失業者の日常的な生活保証、何らかの労働の機会に恵まれることで今までの技術・技能の維持、実質的な次の仕事を得るための



1999年英国バーミンガム市内のLETS団体の秋の収穫祭・交流会風景

の資金がないのであれば、そのツールをコミュニティで創造していくのがLETSである。また、市場的には価値がなくても、コミュニティにとっては重要な価値のあるシャドーワーク的な仕事、コミュニティ的な仕事は多くある。それを住民自身が生み出し、地域コミュニティに貢献していくというコミュニティ経済のオルタナティブの道具として活用できる。

現在、LETSの事務所は、クレジットユニオンの建物の一部を借用し、その借用代金はLETSでクレジットユニオンに払われている。クレジットユニオンもLETSの構成員であり、コミュニティ銀行とコミュニティ通貨のパートナーシップによる複合的なコミュニティ経済が成立している。豪州には現在、300以上

キルや機会の確保、コミュニティ内でのコミュニティションが図られることで孤立しがちな都市生活の改善、インフォーマルな学習の交換、地域レベルでの経済の再生(LETSとポンドを併用して交換もあるということが大きい)、多様なコミュニティションにより地域内での階級的差や年齢差等による障害が解消されること、不用なもの交換の活用により環境負荷を少なくする等の効

のLETS組織がある。個々のLETSは地域で閉じているが、それらの個々のLETSの相互交換システムも成立してきている。その発祥の地がマレーニLETSである。

### 英国でのLETSの動向

LETSはローカル・エンプロイメント・トレーニング・システムとも解釈できる。サービスやものの地域内交換が、市場経済に乗らない雇用の場と機会を提供する。それを契機としたコミュニティの活性化に役立つという視点である。

英国でのLETSは、低所得者層や、失業者層の生活を地域経済・社会に組み込むためのソーシャル・ポリシー的な道具として使用されている面も強く、後者の雇用の交換という視点が重要となっている。地域で

果を上げている。

リード大学のコーリンたちの1996年全英調査では、350団体あり、3万人のメンバーで一年間の経済行為をポンドに換算すると、2・1万円になるという報告がある。また、有機農産物の生産と普及の国内のリード団体で、有機農産物の認定機構のチャリティ団体であるソイルアソシエーションが勧める「ローカル・フード・リンク」運動の中では、このLETSを組み込み、農村地域の有機農家と地域内消費者との連携を図ろうとする動きも出てきていた。LETSでの地域通貨とポンドとの共存併記や組み合わせでの交換行為も一般化しつつあった。

### コミュニティビジネス支援組織(LEED)

多様なコーポやLETSを立ち上げて、住民主体でのコミュニティ経済の活性化を勧めてきたマレーニにとっての次の課題は、住民自身が始めるミニ・ビジネスの起業化に対する支援援助組織の立ち上げであった。1997年有志が集まり、LEED(ローカル・エコノミック・エンタープライズ・デベロップメント)コーポを設立。地域のコミュニティ起業化支援センター的な機能を果たす。その後、LEEDは、先のクレジットユニオンとパートナーシップを結び、起業家は資金援助を得ることができた。LEEDは最初の一年間は起業家の事業が軌道に乗るような援助を行う。その結果、援助がない場合と比較して成功事例が増加してきている。このことは、クレジットユニオンの融資の安定化にもつながる。

のオルタナティブな労働形態、シャドーワークを地域経済・社会の中に組み込む方法でもあり、その結果、地域コミュニティのコミュニティションを高めている。英国のLETSを普及させている民間団体「LETS LINK・UK」のパンフレットには、「LETSは、コミュニティと地域経済の再生のための新しい道を提供する」とある。市場経済に影響されず、自分たちの労働の価値を自分たちで図って地域内で交換するというシステムであるとして評価している。私が1999年英国で調査し

1995年時のクレジットユニオンとLETS事務所前の看板



## 複合化した持続可能な手作り型コミュニティ経済の構築

マレーニの20年以上に渡るコミュニティづくりの歴史は、移住民の生活ニーズから食料確保のためのコーポが手づくりで始まり、その後多様なニーズに対応したコーポが展開。地域のお金を有効に循環させるためにコミュニティ銀行を起こし、一方で、その金銭経済から排除されてしまう低所得者層のためのコミュニティ通貨LEETSを創造し、コミュニティ内での意思とモノ、サービスの循環が持続的に発展してきた。

そして、それらの動きの中で、より個々の人たちがコミュニティに役立つ仕事づくりを率先して進めていくための、コミュニティ起業化促進のためのLEED組織が起き、より

多くのコミュニティ内での雇用の場が提供されてきている。現在これらの個々のコーポ的、コミュニティ組織は相互に複合化して、マレーニの環境、社会、経済が三位一体的な維持発展していく方向を支えてきているといえよう。

## コミュニティ経済の活性化のゴールデン・ルール

以上のマレーニのコミュニティ活動を当初から担ってきたシル・ジョーダン女史はその講演の中で、「コミュニティ経済の活性化のゴールデン・ルール」を述べている。まずは、コミュニティでのプロジェクト成功のスタートは、「コミュニティ内での「必要性」の見極めである。これを間違えるといくら素晴らしい理念やアイデアも実現しなす持続しないとい

う。日本各地での地域通貨が十分に発展しない点も課題である。そして、わかりやすい共通のビジョンと明確なゴールの確認である。

①彼女のいうゴールデン・ルールは、以下である。「①小さく始める。②同じような経験をした人たちから学ぶ。③人ひとが得意とし、できることで参加してもらおう。④自分は価値があり、「みんなの役に立っている」ことを感じ、確認し合う。⑤人びとに協力して働くことを教えよう。⑥最低限二人以上がそのプロジェクトを理解していること」(「個人のライフスタイルとコミュニティの自立」P16を簡略化して引用)

マレーニの試みは20年以上続く、豪州の新興地でのゼロからのコミュニティづくりとそのためのコミュニティ経済構築の実験的、先進的な試みであり、そこから多くのことを学ぶこと

ができよう。

一方、日本では、講、結び合いのような伝統的な相互扶助システムの残る日本の農山村地域では、これらの古い良いしくみを活かす、かつ、新しいコミュニティ活性化のツールを組み込み、コミュニティレベルでの環境・社会・経済の三位一体的なシステムづくりを、新田園人と一緒に取り組むことが今後求められていこう。既に、全国各地での実験や試みが始まっており、それらの情報交換と相互理解を深めていくことでその道が開けていく。そのための一助に本稿がなることを期待したい。

本稿を書くにあたり、1997年からの豪州、英国調査およびパーマカルチャー・センター・ジャパン主催シル・ジョーダン講演、『個人のライフスタイルとコミュニティの自立』(沖縄国際大学公開講座、2002年、シル・ジョーダン、デジャーデン(由香里)を参照。

# NPO法人『篠原の里』の自立交流アクション報告

文 糸長浩司

パーマカルチャー・センター・ジャパン(PCCJ)は、1996年に神奈川県藤野町篠原集落の廃屋、荒廃農地を借用して、日本で最初のパーマカルチャー運動の集落的活動を始めた。本報告は、人口230名ほどの篠原集落での集落住民による地域自立、環境共生活動に関する報告である。

篠原は、神奈川県の水源地域で最北の藤野町南部に位置する中山間地域である。藤野町の「芸術のまちづくり」運動の成果として、篠原にも多くの芸術家が移住し、新旧住民による協働型地域づくりが活発に行われてきた。PCCJの活

動も、事務局長の設楽さんが定住し、そんな新しい活動の一環を担ってきている。集落一体となつて、県の指定天然記念物の里山の蝶であるギフチョウの保全活動、敬老の日の集い、子どもの夕べ、蜚観賞、「ぐるっとお散歩篠原展」と称して芸術家のアトリ見学、農家の屋敷見学、EM菌農地見学、PCCJ農地見学等オープン・ガーデン型の集落芸術展の開催、PCCJの横にある廻舞台のある大石神社での文案等の人形浄瑠璃の公演が集落の自主活動として実施されてきた。

そんな中、集落の中核施設であつた



1「篠原の里」の看板 2 全戸に付いた屋号看板 3 改築完成した「篠原の里」センター施設 4 教室を改造した宿泊室 5 2005年8月6～7日に行われたパーマカルチャー・ギャザリング

童保育園、放課後の小学生の溜まり場、都市住民の体験交流のための研修、宿泊サービス等の機能を果たし、また、集落の多様な人たちの溜まり場的な機能を果たしつつある。NPO法人の将来の希望として、交通サービスや老人福祉事業等も話題としてあがってきている。自分たちの暮らしは自分たちで支え合う、そのための自立的で開放・交流的な営みが多様な主体の参画で起きている貴重な集落である。

「篠原の里」施設は、自然環境との共生をテーマとして、土間空間、土の壁、地元の伐採した樹木の木材活用（食堂のテーブル、棚、宿泊室用の床板）、微生物による自己完結型の完全汚水浄化システム、ペレットストーブの設置等の建築的工夫が施されている。また、2005年度は「篠原の里」の芸術家高橋政行さん、石窯作家須藤章さん、日大系長研究室の協働のワークショップで、厨房前に本格的なパン窯づくりを実施し、夏の子ども

町企画課と相談して、地元住民団体が受託者となる国交省の「多様な主体の参加と連携による活力ある地域づくりモデル事業」（2003年度）の計画づくりの受託事業を「篠原地区振興協議会」が受託。筆者の研究室（日本大学建築・地域共生デザイン研究室）がファシリテーター役となつて、「篠原の里」の計画づくり、および今まで実施してきた交流イベントの継続と評価、新たな環境整備や交流イベントの開発、廃校活用計画づくりを実施した。集落の資源マップづく

り、集落全戸の屋号調査と屋号看板設置、「篠原の里」の看板設置（これらは地元の大工さんと芸術家の共作）。廃校を「篠原の里」センターとして、地区住民の憩いの場、育児支援、都市農村交流事業拠点施設とする改造計画プラン作成、集落内での炭窯づくりの体験ワークショップ等を実施した。

2003年度は廃校計画づくりを進めると同時に、改造費の資金獲得のために、神奈川県での水源地域の活性化のための「交流の里づくり」事業に申請し受理され、2004年度はその改造資金（県および町からの資金）により、廃校を改造し「篠原の里」の拠点施設が竣工された。その運営は、先の「篠原の里」設置準備委員会の加藤正樹さんらが中心となつて、NPO法人「篠原の里」を設立し、集落での自主的な運営が2005年5月より開始された。施設運営のスタッフの中には都市からの移住民たちもいる。施設は、パブ等の食堂、子ども育児（見

たちの体験交流イベントで活用されている。2005年8月、全国のパーマカルチャーリストたちの集い「第2回パーマカルチャー・ギャザリング」が、この施設を会場にして70人ほど集まって実施できたことは、PCCJ運動の10年間のまとめとしても意義深いことであった。

「篠原の里」の試みは、まだ明確な形でのエコビレッジにはなっていないが、自然や農的な暮らしの体験交流、学びをテーマとした体験学習型エコビレッジの方向性で動き始めてきているといえる。

13万5000の集落コミュニティが残っている日本は、世界的に貴重な農的暮らしの環境が維持されてきた国である。その集落環境の伝統的な良さの継承と再生を、地元住民と都市住民の協働で実施すること、そのために、パーマカルチャーの倫理、論理、デザイン手法をどう日本的に展開していくのかが大きく問われ、期待されている。

1 「篠原の里づくり」での炭焼き窯づくりワークショップ 2 篠原展での旧廃校舎での自然エネルギー展示 3 人形浄瑠璃上演風景 4 篠原展での集落住民による野外演奏会 5 ワークショップで作ったパン窯、オープン付き。鉄の扉は、地元の芸術家・高橋政行さんの作品 6 地元の材で地元デザイナーと住民で作ったパブのテーブルで、完成祝いの一杯



住まいを手に取り戻す

# セルフビルド という希望

文 山田貴宏



## Profile

一級建築士。NPO法人パーマカルチャー・センター・ジャパン理事。1966年神奈川県生まれ。1992年大学の建築学科都市環境工学の分野を修了後、ゼネコンにて都市のエネルギー供給設備や省エネ、自然エネルギーを使った施設の業務を担当。1999年より一級建築士事務所・長谷川敬アトリエ勤務。主に国産材の木を使った住宅の設計を専門とし、地産地消の家づくりを目指す他、自然エネルギーや水循環を考慮した自然と調和した家づくりなども行っている。「東京の木で家を作る会」に参加、「木の家ネット」会員。2005年パーマカルチャーのデザイン手法等を取り入れた一級建築士事務所「ビオフォルム環境デザイン室」を設立。Tel/Fax 042-572-1007 e-mail: tyamada@bioform.jp http://www.bioform.jp ビオフォルムとは生命や生態系と形、形体のデザインの融合という意味

## 自分の手でつくるということ

ここ数十年の間に、ものづくりの現場がどんどん産業と流通の中で統合され、「安い、早い、うまい」というメリット(?)を享受できるようになった一方、手触り感のある豊かなものがどんどんなくなってきたように思います。それは自然とのコンタクトの機会を減らし、自然を見る目というものを奪ってきたのでしょうか。かつて人びとは自然との交歓の中で自分の存在を確認し、自然の恵みを認め、その恩恵に預かって生きる術を培ってきました。そしてそれが自分で生活する、という自信を育んでき

ていたと思います。

しかし、現代の我々の生活はあらゆることが「外注」されていて生活感を失ってきています。とても多くのことが他人の手にゆだねられているのです。もう一度自分の手にリアリティと生命感を得たいという人は多いのではないのでしょうか。孔子は「麻雀でもいらいから手を使え」と言っているそうです。

その手始めとして、自分の生活を包む「住まい」である建物を自分でつくってみる、というのは、最高に豊かな遊びだと思えます。建物がどんなものであれ、それがその人の生活を包む器である以上、自分の手で

つくる(セルフビルド)ということは生活をつくりあげていくことに他なりません。

セルフビルドの楽しさは、それが自分の手で実際にできてしまう驚きだと思います。それは何ものにも代えがたい喜びを生みます。隙間だらけの小さな小屋をつくったある友人は次のように言いました。「この家は隙間風だらけだけど、自分でつくったから温かいんだよなえ」。また別の友人は「この家は低気密だけど皆が集って暮らすから高団欒なんだ」と言っていました。

ひたすら産業のしくみに乗り、宣伝と広告による家づくりが現代では主流になってきていますが、それとはまたまったく違っ

た家づくり、住まいのつくり方がある、ということをご自分の手で確認してみてくださいいかがでしょうか。

## 皆でつくる現代の「結」

現代では共同体が崩壊してしまつたと言われます。昔ながらの窮屈なイメージがあるのですが、共同体の良いところも全て失われてしまつたようです。かつての共同体での「顔の見える関係」が金銭のやりとりによる関係にほとんど取って代わってしまったのではないのでしょうか。昨今では「地域通貨」のようなしくみで、また顔と顔をつなぐ新しい試みがなされているようですが。

さて、家、あるいは建築もかつては村総出で互いに手伝いながらつくって来ました。昔ながらの土壁は皆で竹を編み、土をこねてつくつたし、藁葺き屋根の藁はそれぞれがストックしておいて、必要な時に必要な家に提供し合っていたのです。

金銭では交換できない労働や時間の貸し借り、すなわち「結」のような相互扶助システムをセルフビルドの家づくりに再び応

用できないのでしょうか。セルフビルドを素人の人がひとりで行うとなると膨大な時間と労力、そしてお金が必要となります。しかしながら、現代の「結」により多くの人が助け合いの精神を感じながら、少しずつ労力を提供し、そしてまた提供した側もその現場で技術を学んで帰っていくようなしくみができたら、その中で新しい人間関係もまた生まれていくように、家づくりが仲間づくりのしくみになるのです。

## 全てのプロセスに関わる

家をつくる、という作業は非常に多くの専門職に分かれ、それぞれが非常に優秀な技術でもってつくられていきます。日本では「棟梁」という存在がチーフディレクター、プロデュサーの役割を果たし、世界に冠たる職人集団を統率していました。セルフビルドでつくるといことはその全ての過程を個人が請け負う、ということになります。日本の学校では家の基本的なことさえ教えないようです、生活のあらゆるシーンにおいてほとんどが細分化してしまつた現代にあつては、家づくりの全体像を個人が俯

瞰するという機会はありません。

バイオガスクャラバンという手づくりのバイオガスプラントをつくる試みでは、タスクをつくるのにコンクリートを使わず、レンガを積むそうです。それはコンクリート工事になると仕事が細分化し、全てのプロセスが見えにくくなるからだそうです。

セルフビルドではプロのような専門職の細かい知識までは不要ですが、全ての工事について基本的な知識が必要となってきます。それは家という器を通じて自分の生活全体までも俯瞰するよい機会となり得るのではないのでしょうか。パーマカルチャーでいうところの統合されたデザインの実践の良い機会でもあるのです。

## 工期もないクレームもない

セルフビルドでつくる楽しさのひとつは自分のペースでつくることができる、ということだと思います。他人に請け負ってもらつてつくる場合、特に住宅メーカーのように、契約と保証でつくる家では工期がきつちり決まっています、図面に書いてあること以外は実現がなかなか困難でしょう。しかし、自



1～6 私が仲間と建てた軽井沢の山小屋  
7～8 シャロム・ヒュッテのストロベールハウスの土壁塗り

分の目の届く範囲でつくるようなセルフビルドの場合、自分の生活のペースに合わせてつくり込んでいくことが可能になります。また、全て自分の責任でつくっているわけなので、自分が納得していきえすればどんなモノができればよと満足なのです。だから当たり前ですがクレームもありません。もっとも工期が長くなり過ぎて飽きてしまったり、というケースも多々あるようですが。

### アドリブの楽しさ

セルフビルドの醍醐味は現場で判断しながらつくり込んでいけるということです。最低限の図面があればよいのです。セルフビルドでつくる場合、材料の種類や予算も限られていることがほとんどでしょうから、なんとかして現場で工夫の限りを尽くしてつくることになりま。そこにむしろ「自由さ」があるように思います。余った材料の使いまわし、庭に落ちているものを使えないか、廃材利用はできないか、というのと知恵を絞ることになるのです。

また、現在の工業製品は大量消費、大量廃棄という構造の中で成立しているの

れは自然の力をそのまま建築に吹き込み、閉じ込める作業でもあるのでしょう。しかし残念なことに木造建築をつくる現場でさえ、昨今は鑿や鋸、鉋を持っていない人たちが増え、そして工具が電動鋸や電動の釘打機に取って代わり、大工さんの本質である木の性質が読めなくなってきたり、人が増えているようです。

また、いうまでもなく自然素材という循環型の資源を使うということは環境にとっても良いことです。これ以上、化石燃料をはじめとした地下資源に頼っていくのは限界が目に見えています。また、シックハウスや昨今のアスベスト問題を引き起こしたような新建材に比べて、自然素材はその長きに渡って人びとに利用され、淘汰されてきたので、その安全性に関してはリスクがとて少ない、ということが言えます。

### 地場の材料・技術を使う 地産地消の家づくり

また、自然素材を使うことと同じ理由で、同じ自然素材であってもできれば地元で採れる材料を使うのが良いのではないでしょ

一度捨てられたものは廃棄物にならざるを得ません。それをリユースする構造というのは現代の産業社会の中では残念ながらもいのです。しかし、そこに可能性ががあります。「拾ってきた材料」でつくる「拾ってきた家」もセルフビルドでは実現可能なのです。その結果、何百種類という部材をアセンブリー（組み立て）してつくる現代の家よりはるかにおもしろいものができあがる可能性があります。

### 自然素材を使うということ

手に感覚を取り戻すセルフビルドでは、できれば極力自然素材を使いたい、と思います。手を使う、ということは動物としての本能を呼び起こすことにつながると思いますが、その感性はやはり本物の素材に触れてはじめて甦ってくるものだと思うのです。現代の工業製品による家づくりは自然素材の不均一さを嫌った結果です。しかし、逆に言えば自然素材だからこそ、その自然を読み込む力と目をもった人たちが、すなわち職人さんたちが必要だったのです。自然の癖、性格、特徴を読み、家をつくる。そ

うか。その土地でとれる材料でその土地から生えたような建築が良いと思います。食では「地産地消」という言葉がありますが、建築も同じです。その土地の特性を内包した材料でその土地の風土に合った建築をつくり、また、地場の技術も同じように育んでいく。地場の技術はそれぞれその風土に合わせて発展してきた経緯があります。当然その地域の気候やライフスタイルにあったものになっているのです。その技術を尊重することは大事なことでないでしょうか。地場の材料を利用するということは、その地域の環境資源を手入れすることです。から、自分たちの生存の基盤を守ることにもつながります。また、経済的にもその地域の中で流通が成立し、お金が都会に出て行ってしまうようなことがないのです。

### 環境と調和する 「住まい」にしよう

セルフビルドでつくる家は環境と自分の折り合いをどうつけるかを試す場でもありますから、自然とのコンタクトをできるだけとることができ、太陽と風と雨など自然

の恵みを十分に受けることができるものが良いと思います。

閉じたカプセルのような家で、機械が室内環境を強引に調節するようなものでは季節に応じた住まい方はできません。「開いた」家で、ほどよく外部の環境とつながってその豊かさを受け入れられるような家を目指すのが良いのではないだろうか。

さあ、温かさを「住まい」に取り戻そう

セルフビルドからはじめて、家づくり一般論のような話になってしまいました。

現代の我々はツルツルとしてきれいだいが、愛情のないものに囲まれて暮らしています。ほとんどのことがお金で解決し、消費するだけの生活になりがちなのです。手ごもを生み出す、ということをお忘れてしまっています。そのことは自然の恵みを忘れ、より少ないもので豊かに暮らす知恵を忘れてしまいました。

「家づくり」から「住まいづくり」へ。現代の家はその「箱」を手に入れることが

目的化されてしまっていて、そこに生活の温かさという眼差しがいささか欠落していると思われます。セルフビルドということを手がかりに自分の生活は自分の手で作ることができるんだ、ということに気がつけば、家という箱、あるいは場所が豊かな生活を實現する場として、非常に生き生きとしたリアリティのあるものになってくるのではないのでしょうか。さて、まずは鋸と金槌をもって野に出ましよう、そして小屋をつくるのです。小さいけれども豊かな楽しみがそこにあることを保証します。

## デュアルライフを实践するパーマカルチャー塾へ

熊本発



文 松下 修

### Profile

NPO 法人パーマカルチャーネットワーク九州代表理事。松下生活研究所代表。熊本大学、鹿児島大学で非常勤講師。人と自然が調和した、自給度の高い、持続可能な生活スタイルや社会システムの實現を目指すプランナー。菊水町の肥後民家村活性化事業や宮崎県諸塚村の産地直送住宅の開発・推進事業などに関わる。

翌年の夏に、オーストラリアのクリスタルウォーターズに出かけ、帰国一週間後にパーマカルチャー・センター・ジャパン主催の第一回パーマカルチャーデザインコース（ジョー・ポラッシュャー講師）を受講した。2週間の暮らし（コース）は、人里離れ、テレビもなく、仲間だけが共有する一体的な感覚があった。それが、よりパーマカルチャーを忘れることのできないものにした。今でも鮮明な感覚が甦るが、帰りの中央線の電車の中が異様な近代社会を表しているようで、まるで竜宮城から出て来た浦島太郎であった。

ところで、三大都市圏に住む市民5万人を対象にした「ふるさと暮らし」意向調査によると、回答者の40・3%が「ふるさと暮らし」をしたいと答えており、そのうち約8割が「定住」を希望しているという。それだけ、都市生活のストレスが大きいのか、それとも自然な田舎暮らしに憧れがあるのか、いずれにしても日本は大きな岐路を迎えている。

2007年から始まる団塊の世代のリタイアは5年間で1000万人に達する。それに伴う経済の変化は、赤字国債の差し

迫った状況を考慮すると、日本の行方は大きく揺らぎ始める。既存の価値観や社会体制が本格的に崩壊して行く中で、人びとが都市と農山漁村を行き交うライフスタイルが定着し、ロシアのダーチャ（菜園付きコーテージの暮らし）のようなライフスタイルが目につくようになるだろう。その中で、パーマカルチャーの日常の生活を眺め、暮らしをデザインするという己やコミュニティのデザインワークは、より貴重な学びをもたらしてくれるのではないかと思う。

デュアルライフ（農都を双方に行き交う農的暮らし）を、現在のパーマカルチャー塾に当てはめて考えてみた。農家は、農的暮らしを望む参加者から授業料をいただいで、農地に建てられたセルフビルドのストロベールハウス（阿蘇の草原復元のススキを利用）で座学し、実践の場で教授する。参加者は収穫された野菜やお米を販売しても良いし、農家と分け合っても良い。週末に来る参加者は、年間を通して農家のパーマカルチャープログラムのもと、学び耕し、週末にはストロベールハウスに宿泊し、農的暮らしを味わう。

それまで農的暮らしを行うことが、持続可能なライフスタイルのひとつだとは思ってもいなかった。1999年の冬、東京・青山のパートナーシッププラザ近くの書店でグリーンの本、パーマカルチャーデザインの本を何気なく手にしたことが、人生の大きな変化の始まりであった。その時、里地ネットの通信で糸長さんが書いたパーマカルチャーについての記事を不思議な感覚で読んだことを思い出していた。

農家は提携した有機農業の研究会を通して、不作付け農地を効果的に利用できる。参加者は、未来の半農半X（エックス）や自給農家のスタートになる。農民にならなくとも、市民は農的暮らしを味わえる。農家と一緒に連携したパーマカルチャー塾をデュアルライフの中から学べるしくみである。

九州では、まず始めに熊本有機農業研究会とパーマカルチャーネットワーク九州が連携し、そのしくみを構築し、実践して行きたい。この構想は、北九州の元若松区長の野崎さんから農地を自由に使って良いと言われ、アイデアをいただいた。野崎さんは、糸長さんの縁でキューバと一緒に行った仲間のひとりである。人生は接縁効果ということか。そして、シャロム・ヒュッテの白井さんや詩世さん、梅崎さんたちとの心通う、永遠の仲間たちとの協奏曲も始まるのだらうと思っ。



パーマカルチャー塾のフィールドワーク



1 畑の中に生えていた樹や土手にあってもあまり日陰が強すぎような樹は、伐採して薪やキノコの原木に利用 2 背丈以上の雑草を刈りやうのはかなりの重労働。何も手をつける前に農園全体を見渡すとその雑草の様子で水はけや地力の具合がわかる 3 刈った草は燃やしてしまわずに、不耕起栽培の自家菜園の造成や果樹の苗木の植えつけ時のマルチ材に 4 せっかく拾い集めた石なので、家の前のスパイラル型ロックガーデンや土木工事に全て利用 5 雑草を片付け耕してみれば、大きな石(岩?)がゴロゴロ 6 我が家の唯一の暖房源オープン付薪ストーブ。岩手の冬は寒く、そして長い

The problem is the solution

# 「問題」は「解決」の糸口に

文 = 酒匂徹さかわたおとる

Profile

1968年岩手県生まれ。学生時代から有機農業の研修を受けて実践を続ける。1994年ニュージーランドで1年間パーマカルチャー研修、デザインコース終了。以後岩手の山間で自給をベースにした農園づくりに汗を流し、日本の食生活や気候風土に適応できるパーマカルチャーデザインの具体的な姿を探求している。

## 農園との出会い

岩手の夏はうだるような暑さが続くことはほとんどありませんでしたが、それでも農作業の合間のいっづく時には、田畑の畦に点在している涼しい木陰は本当にありがたいものです。その木陰のそばで育つスモモが本格的に実をつけ出し始めたので、畑の土手が心地いい休憩の場とおやつを提供してくれるようになってくれました。

1995年にこの土地を始めて訪れた時には、10年以上も荒らし放題にしていた休耕田だったので、背丈より高いササやアスキだけでなく、いろんな樹木まで結構伸びてしまっているような状況でした。今この農園を訪れる人にはその様子は想像できないかもしれませんが、当時は同行してくれた東和町役場の方も「こんなに荒れているところで本当にいいの？もう少し待たばもっといいところが出てくると思うけど」と心配してくれたほどでした。

もちろん、もし私がすぐにも農業で生計をたてるということに固執していたならば「二の足を踏んでしまうような条件でし

向性を見出そうということです。この農園がとて荒れていたことは、確かに整備にエネルギーも時間も費やしてきましたが、もうすでに雑木が生い茂っている状況だったために、それらをそのまま残すことや、一般的にはまだあまり借地では認められない「樹木を植えたい」という願いもすんなり受け入れてもらえたのだと思います。

永続的な空間をデザインしようとするパーマカルチャーにおいては、多年生植物、特に樹木を重要視しています。幸運にも、樹木の力を十分に活かした農園づくりができるような場所と巡り会えたのですから、その条件を最大限に活かしたデザインをと、これまで試行錯誤を続けてきました。

特に、生真面目なお百姓さんの手にかかれば、邪魔物扱いされて切り倒されてしまっていたであろう、土手や農道の脇に自生していた樹木たちの個性をよく理解して、それをデザインに反映させることに努めています。

## 感謝と役割

この土地は、ゆるやかな山間の谷地が開

たが、幸い(?)ニュージーランドでパーマカルチャーなるものを学んだ後でしたので、この「荒れている」ということもひとつの利点としてみることでできましたし、それ以上に、まわりの一般農家からはある程度離れていて、裏山に雑木林が控え、家のまわりにある程度の広さの農地があるという条件は、自分が学んできたことを活かした暮らしの場としての農園づくりには絶好の条件にさえ思われたのです。まだ借りられると決まったわけでもないその時に、もう自分の頭の中にはこの土地を活かすデザインのイメージがフツフツと湧き上がってきてしまったのです。

## パーマカルチャー実践のキーワード

パーマカルチャーを実践していく際のキーワードがいくつかありますが、そのひとつが「問題は解決の糸口」(The problem is the solution)です。何か不都合な問題に直面した時にも、それをただ「あーあ」と嘆いてしまうのではなく、その「問題」を逆手にとって利用するとか、あるいは視点を変えて何かしら前向きに関わっていける方

墾された小さな棚田が、20年ほど前に機械作業に対応できるよう大きな区画に造成されたようすです。

表土の大移動をってしまったその工事の爪痕をそのまま残したまま、しばらく耕作放棄されていたために、そこに生えていた植物の種類や成育具合を見れば、水はけの善し悪し、地力のあるところ、ないところが一目瞭然の状態でした。

特に目立ったのは、やせ地をものともせず、自らが成長することでどんどん土を肥やしてくれるネムノキ、ハギ、ハンノキ、フジ、カバ、タラノキなどでした。パイオニアプランツとも呼ばれるこれらの樹木は、根に根粒菌が共生して空中窒素を固定したり、すぐに成長して日陰をつくり、養分に富む葉を堆積することで土壌を豊かにしてくれます。

自分たちがここを耕し始める前から、ゆっくりと、しかし確実にこの土地をまた豊かな状態に戻そうとしっかり働いてきてくれた樹木たちに感謝しつつ、私たちもこの時この場所で暮らしている自分たちと与えられた役割ということを意識しながら、一緒に育っていきたいと思っています。

# 瓦理論とパーマカルチャー

文 = 天狼今輝

20世紀は瓦を縦に重ねた時代です。クラスで一番会社で一番ワールドカップで一番。

縦に重ねた瓦の下にはひとりしか憩えません。

そして二〜三枚欠けても問題ありません。

瓦は縦に重ねるのでなく横に重ねる。

30%重ねて横に並べると雨の漏らない一番広い面積ができます。

一枚欠けても雨が漏ります。

そしてどんなものでも存在価値があります。

またたくさんの人が憩うことができます。

縦型から横型に。

リーダー型からパートナーシップの時代に。

ダーウィンの弱肉強食から今西錦司さんの弱者も住める棲み分け論の時代に。

トラとライオンは争いません。

片や林に片や草原に棲み分けているからです。

草だって虫だって役割があります。

奪い取る時代から分かち合う時代へ。

アメリカンドリームを達成したビルゲイツ。素晴らしい経営者です。

片やリナックスという組織があります。全てのソースを解放してみんなで直す。

使ってもらえることが自分の喜びという資本主義の根底を覆す考えです。

今では多くの人たちがリナックスのサーバーを無料で使わせてもらっています。

与え合う世界です。これは人を幸せにします。

資本主義は物の豊かさを生みました。

それは自然と第三国が犠牲となって成り立っているしくみです。

そろそろこのしくみを変える時期にきています。

日本人の暮らしを世界中の人がすると地球が2・5個必要です。

持続可能ではありません。

21世紀は分けたものが再び合う時代。分かち合いの時代です。

そして本物が評価されつながりを取り戻す時代です。

分断して競争するしくみから融合して共生する時代を迎えています。

まさにパーマカルチャーはそのつながりを取り戻すしくみなのです。

Imagine all the people Living life in peace

人びとが平和に暮らしているということを想像してこらん。

LOVE ALL SERVE ALL

あなたと私はばらばらで別々なんだという考えは分離対立を生みました。

分離することにより専門化が進み効率も良くなり物質的には豊かになりました。

しかし個人の利益の追求、競争は人を幸せにはしませんでした。

分離の時代は終わりました。これからはひとつにとけ合う時代です。

あなたと私。宇宙も全てがひとつなのです。

冬の朝日(安曇野)

# 命は ひとつ

文 天狼今輝

我々名を持った個人は川にたとえられると思います。滴が集まり川になります。ここで初めて名前が付きます。名を持つことによって区別が生まれます。本当は同じ物なのに分別が生まれます。ジョン・レノンが国がないことを想像して「ごらん」と歌います。そうなのです。全てが同じ命なのです。

川の名は「あなた」という名かもしれません。この名を持つことによって自我が形成され執着を生み出します。自我は個性を生み多様化し創造を生みます。人が成長する時には必要であり重要です。急流だった川も大きくなることによってゆっくり流れます。平野を潤し役にも立ちます。人の晩年かもしれません。川は海に入ることによって名前がなくなります。たくさん命が海で一緒になります。表層にいるものは風にあおられ波となります。でも深海にいるものは風の影響も受けずに深海で心静かにいられます。悟った人の姿かもしれません。そして光に導かれ見えない天空に行く命もあり。また地上に来る命もあります。これが輪廻転生です。

目に見えない蒸気は空気中に存在します。川と同じ時空にいるのです。ある時太陽光に導かれ水滴となり命を育みます。今度は私になるのかもしれませんが。水滴には海光と同じ記憶があります。宇宙意識 純粹意識 深層心理 仏大なる命なのかもしれません。命はつながっているのです。あなたと私はつながっており海は神の世界です。山と海全てを結ぶものそれは海の記憶を持ったあなたの心なのです。地球の生きとし生けるもの宇宙はひとつなのです。

ジョン・レノンは歌います。国がないということを想像して「ごらん」。それは決して難しいことじゃない。個別の宗教も殺し合うということも必要ない。みんなが幸せに生活していることを想像して「ごらん」。

人生は川なのかもしれません。短い川もあり長い川もあります。澄んだ川もあり濁った川もあります。激流もあればとうとうと流れる川もあります。暴れ回るときもあれば大地を潤すときもあります。でも全て時が来れば大海と一緒になります。

命はひとつです。



一根万葉 葉隠れ

画・上野玄春

# 素晴らしき お米

文 = アコ



道を司るお米道祖神

全てを受け入れて寄り添う。  
そこに命が生まれる。

愛は理解です。インディアン言葉です。  
マザーテレサは言いました。

愛の反対は憎しみでなく無関心。

理解しようとする心がないことです。  
争いの多くは理解が足りないのです。  
だめと言わずにどうしてなの、  
と言って寄り添う。

対象を変えるのでなく同化する、  
和の文化です。

ビル・モリソンは反対運動では  
世の中は変えられない。

自分がエデンの園をつくることによって  
伝えられると理解し、  
パーマカルチャーを始めました。

理解し和合する。

それだけではまだ半分だと  
インドの聖者は言います。

その理解を伝えてはじめて完成です。  
子どもの誕生も、伝えることです。

自己の中に仏、神を見い出す。

(これはロックスパイラルガーデンと一緒ですね。  
二次元から三次元になって多様性が生まれる。  
同じ次元にいると争うけれど次元を上げてみる  
と全てが一緒に見えます。富士山をあちこちか  
ら登るようなものです。俯瞰する目。ビル・  
モリソンがいつも人を案内する時、高いところ  
から低いところにフォーカスしたように。第三  
の目を持つことです。それがネパールやインド  
でデイカをつける理由かもしれません。俯瞰す  
る第三の目を持ちたいという表れですね)

1 から4 が自己です。5 から8 が家族。  
9 から12 が社会。

自転。公転。宇宙に対比できます。  
それが自己と世界の関係です。

4 は死であり完成です。  
花開いて実を結びます。

次元が変わり伝わります。転じます。  
それが子どもの誕生でもあります。

死は完成と書きましたが、少し欠けています。  
4 年に一度つるつる年があるのは

めしべとおしべがひとつになって  
子ができる。  
子ども：人が共に生きた姿です。  
宝ですね。

お米とは↓おしべとめしべがふれあい、  
理解してひとつになって子ができる。  
おしべ 子 めしべ↓おこめ

素晴らしいものたえでもあります。

歌手のコメコメCLUBの  
名前の由来を知ってますか。

特に有名な人には

※**米**印が付くのだそうです。  
その米がふたつ付くようなアーティストに  
なりた。

そう思ったそうです。

苦しみに寄り添った次に歓喜が  
やってきます。

喜びは苦の次にあります。

1 から10 までを生きるのが人間です。  
人と人の間を生きる。

1 から10 を生きる。

そのためです。それがゆらぎです。  
それが**○**(**○**チヨン)。点であり無。  
全てなのです。

それはエロスでもあります。  
それが動きを生みます。

欠けているメス**○**とオス**・**が  
ひとつになって、実**○**ができる。

陰陽マークに点があります。

仏から始まって仏になる。

それが人間ですね。

全てに歓喜がありますように。

9の次に10があります。  
苦の次に人があるのです。  
苦を乗り越えた時にはじめて人になれます。  
苦は新たなものを生み出す道、  
芽を育てます。  
人間は苦を抱えて生きています。  
恋人も、友だちも、お父さんも、お母さんも  
お釈迦様はそのことに気がついた時、  
弟子と共に踊り狂って喜んだそうです。  
それはひとつでありゼロ。無の境地です。  
10 ※ 充 完成 人です。  
王様がいます。  
わがままいっばいですので、  
いち、に、い、さん、しい、と囲いをつけます。  
これが国という字です。  
わがままいっばいの王様は、ある時自分に  
点があることに気がつきます。  
王から玉たまになります。  
アセシヨン。次元があがります。  
囲いの外に出られて自由になれるのです。  
いっばいでも王様ではなく  
玉になり自由を獲得する。  
これが人間の目標ですね。

# すべては つながっている

文 = ふるいちまゆみ

今、わたしたち人類は壮大なドラマの中を生きている  
今日も、世界のあちこちできれいなきれいな生命が花開く前に散っている  
確かに世界は陰謀に満ちている

しかし、わたしたちの住む地球では善だけの世界、悪だけの世界は存在しない  
もし、ひとつしかないとすれば、たったひとつの色の世界だから  
あらゆるものが存在するからこそ地球は彩りにあふれる  
だからこそ、地球は美しい  
世界は美しい  
これが、わたしたちの住む三次元の星地球

あらゆるものが存在するからこそ嬉しかったり、悲しかったり  
腹が立ったり、淋しかったり、苦しかったりする  
あらゆるものが存在するからこそ  
自分と他との違いを知ることができ、気づきが生まれ  
そして、存在するすべてのところを感じることが出来る

ここで学ぶためにわたしたちは地球に生まれてきた  
与えられた命を完全に開花するために人間に生まれてきた

ひとは皆それぞれ、別の世界を生きている  
星の数ほどの世界を生きている

しかし  
わたしはあなたであり、他の国の誰かであり、動物たちであり、  
森であり、海であり、大地であり、星であり、宇宙であり、神である

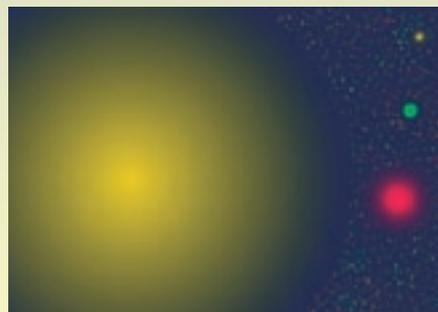
すべては大いなる意識の顕われであり  
すべてはつながっている

今、こうやっているうちにも刻一刻、わたしたち人類の意識によってあらゆるもの  
ところが創造されている。世界が創造されている。宇宙が創造されている

ひとりの力は偉大である  
ひとりの力で世界を変えることもできる

もしも、どこかで、立ちつくす人を見かけたなら  
もしも、どこかで、哀しみにくれる人を見かけたなら  
もしも、どこかで、倒れそうな人を見かけたなら  
もしも、どこかで、怒りにふるえる人を見かけたなら

どうか伝えてください  
あなたたちは愛されるために生まれてきたのだと  
あなたたちは誰かを愛するために生まれてきたのだと  
あなたたちは完璧に自由であると  
そして、あなたたちは永遠に光り輝く存在だということを



あなたたちは神聖である  
地球は神聖である  
聖なるすべてはみえない手でつながっている  
あなたたちはひとりぼっちではない  
すべてはつながっていることを思い出せよ

その時  
世界は生き返る  
世界は生き返る

<http://www.mamutan.com/index.html>



# おとぎばなし 人の花咲かプロジェクト

文 = おがわともこ

むかし昔、人びとは持って生まれ  
た能力を特に活かせることもなく、ま  
るで生活をするために生きているかの  
ようでありました。一日の時間のほと

れたり、感動して心が動かされたりし  
た時に、心の種は「ぴこっ」と目を覚  
ますのです。  
種が目を覚ましでも、芽が出て花が  
咲くまでは、しっかり世話をしあげ  
なくてはいけません。芽がまだ小さい  
時には、外からの強い雨風から守って  
あげ、伸びはじめたら今度はせつせと  
水をやり、陽に当ててあげるのです。

んどを労働に使っていたもったいない  
時代がありました。

その頃、人びとの多くは、自分の中  
心から少し、あるいは完全にズレたと  
ころで生きておりました。元気の源で  
ある自分の中心とつながって生きてい  
ないため、精神的に不安定になったり、  
イライラしてすぐに腹を立てる人びと  
がたくさんおりました。そういった人  
びとの想いや行動の源にあったのは「不  
安」でした。

「不安」が想いの中心にあるので、人  
びとは競争原理や奪い合いの精神に突  
き動かされておりました。心の病にか  
かる者がどんどん増え、家庭の中のの  
暴力や、学校や職場でのイジメ、環境  
破壊に戦争と、世界は破壊のエネルギー  
に満ち満ちておりました。

そんな時代がどんどん進行して行く  
中で、この世界をあきらめるのでもな  
く、嘆くのもなく、はたまた批判す

それは自分自身の仕事です。

人が花を咲かせれば、その花を見た  
他の誰かの心が動き、眠っている種が  
目を覚まします。ひとつの花からは、  
たくさん種の種が生まれます。そして、  
さらに、人は「種を蒔く」ことができ  
るのです。

未来の実りをイメージし、土を耕し、  
種を蒔ける、人という  
生き物。

黙々と種を蒔く人び  
との行為が、ある一定  
値を越えた時、世界中  
に一齐に花が咲き始め  
ました。それらの花々  
を愛でることによって、  
さらに人びとの中に  
眠っていた種も次々と  
目を覚ましていきまし  
た。こうして世に咲く  
花はどんどん増えてい

るのでもなく、本来の人の持つ力を信  
じて、ただ黙々と種を蒔く人びとがお  
りました。

種を蒔く人びとは、「問題の原因は、  
人が自分自身の中心とつながって生きて  
いないためだ」ということに気づいてお  
りました。ですから、人びとが自身の中  
心に戻るような機会をつくっていいこ  
うと、それぞれ自分の好きなことや得  
意なこと種を蒔いてゆきました。

ところで、種はどのようにしてできる  
のでしょうか？ 種をつくるには、花  
を咲かせればいいのです。一人ひとり  
が自分の花を咲かせれば、そこに種は  
生まれます。

土の中には長い間眠ったままの種が  
何千万とあるそうです。それらの種  
は、何かの拍子に土が耕されたり、揺  
り動かされたりすると、その刺激で目  
を覚ますそうです。

人の中にもたくさん種が眠ってい  
ます。そして、何かの拍子に心がほぐ

き、世界はあつという間に、色とりど  
りの花でいっぱいになりました。

きれいな花を見て、「きれい…」と愛  
する時、人は自分自身の中心とつながっ  
ています。愛でるとは、すなわち愛の  
状態にいるということです。

こうして世界は今のような、愛の工  
ネルギーで満ち満ちるようになったの  
でした。

## アホのすすめ

- 「アホは頭に穴が空いているから空気の通りがよい。
- 「『反対の賛成！』バカボンのパパを見よ。
- 「アホは限りなく子どもに近い大人である。
- 「アホは自分と人との区別がつかない。
- 「アホは本当に自分がおもしろいと思うモノに敏感に正直に反応する。
- 「アホは楽しい。ただひたすら楽しいだけ。
- 「アホには期待のしようがない。ゆえに緊張もない。なので、ラクチン。
- 「アホには守るべきモノや失うモノが何もないので怖くない。
- 「アホは正しくも正しくもないので、いつも平和。
- 「アホには誰もいごまない。アホは誰にもいごまない。

(脳内お天気「しあわせ研究会」にて)

## Permaculture ~ Native Culture ~ Hyakusho Culture

# パーマカルチャー ネイティブカルチャー 百姓カルチャー

文 = 森谷 博



### Profile

東京都下、元禄から300年以上続く百姓の家に生まれる。TBSテレビに10年間勤務。ディレクターとしてドキュメンタリーを中心に制作。取材で北極圏から南極大陸まで世界五大陸を旅し、遊動生活を続ける。その後、アマゾンの先住民と出会うことで、自分本来の土に根差した生き方を模索すべく退社。百姓・庭師修業、主婦業の傍ら、パーマカルチャーを学ぶ。個人の映像制作工房「アトリエ 旅する木」を主宰。アマゾン先住民の知恵を語り歩き、百姓の知恵を再発見しながら、土と共に生きる場を探索中。

<http://homepage.mac.com/walkinbeauty/>

の森とひとつになって暮らしているインディオは、自ずからパーマカルチャーの到達点そのものである。先住民の暮らしとパーマカルチャーと私たちとを結び糸を、少々紐解いてみたい。

### 森の哲学者メイナク族の知恵

ブラジル・アマゾンに暮らす先住民メイナク族。いまだ伝統的な暮らしを守りながら森の奥で暮らす人びと。彼らと一カ月間生活を共にしながら取材するにつれ、その深い生きる知恵にほくは打たれていった。

### 身土不二の知恵

生きて行くのに必要なものは、数キロ四方の森から手に入れる。主食となるイモは森の中の畑で栽培し（育て方は自然農そのもの）、サカナは近くの川で釣り、バナナやパイナップルなどの果物は森の中に収穫に行く。時々サルやバクなどのほ乳動物を狩る。半農半狩猟採集生活。家を建てるための木材は一本一本どこ

### パーマカルチャーと先住民文化

ぼくはドキュメンタリーの撮影の中でアマゾン先住民と出会い、彼らの暮らしのクオリティに圧倒された。そして自分の暮らしを自分の手で作りたくなり、仕事を辞めパーマカルチャーを学んだ。やがてパーマカルチャーの基本的な理念と先住民の暮らしの知恵とに多くの共通点があることを知った。

パーマカルチャーの3つの理念、「母なる地球を大切に、人びとのことを大切に、分かち合いを忘れずに」。これらはアマゾンに暮らすインディオにとっては日々の暮らしの中で当たり前のこと。もちろんインディオはパーマカルチャーなどという言葉は知らない。パーマカルチャーの創設者ビル・モリソンは、パーマカルチャーの最終目標を「世界をジャングルで埋め尽くすこと」と言った。アマゾン

リーの中には、私たち現代文明人が普通に使っている多くの言葉が存在しないことがわかった。まず彼らの言葉には「自然」がない。西洋文明のように「自然」を自分と異なる存在として破壊したり、手付かずのまま保護したりする対象として見ていない。ヒトがいて、動物がいて、森があつて川がある。それらが有機的に利用し、利用され、影響し合い、変化しながら共にいのちを育んでいるのがこの世界で、「自然」という人間と離れた別の存在などあり得ないのだ。

インディオは「自然」の一部となり、ヒトという役割を果たし、アマゾンの森をより豊かにしている。アマゾンの広大な森の3割はインディオの手が入っているとも言われる。パーマカルチャーで言うところの、「耕された生態系」をアマゾン舞台にインディオは作り上げてきたのだ。

彼らは「しあわせ」、「ふしあわせ」と言う言葉も知らない。しあわせな状態が当たり前だから。長老は「みんなが仲良

から採ってきたのか知っている。柱は樹皮で結束し、もちろん釘などは一本も使わない。屋根はバナナやヤシの葉で葺く。5年ほどすると屋根材は腐り、いろいろなところが痛んでくるので、家は取り壊され、新しい家が建てられる。取り壊された家の残骸はまた森に返され、土に戻る。家を建てるのは男の仕事で、家を一人で建てられるようになると一人前の男として認められる。

アクセサリーは鳥の羽や木の実を利用して、ボディペインティングに使う染料は植物の種と油を混ぜて作る。陶器は特別な粘土に秘密の「つなぎ」になる粉を混ぜ野焼きする。野焼きに使う薪は、ムラのない焼き上がりをするためきれいに灰となつて燃え落ちる樹皮を使う。このようにすると野焼きのような低温焼成でも割れにくい、水が漏れない陶器が焼き上がる。

### 言葉を持たない

メイナク族のリーダーにインタビューすると、彼らのシンプルなおキヤブ

彼らは「しあわせ」という言葉を知りません。「ふしあわせ」という言葉も知りません。



頭をよぎった。その質問はほくの胸にぐさり刺さり、そして返事ができなかった。なぜならほくは家族との関係を絶ち、自分だけが好き勝手に生きればよいという生き方をしていたから。

「専門家」という言葉もない。そもそも職業という概念がない。皆一人ひとりの人間であって、農民も、大工も、芸術家も、医者も、宗教家もいない。いや、一人ひとりが、農民、大工、芸術家、医者、宗教家の全てでもある。自分の全ての可能性を思いきり開花させ、一部の自分だけでなく自分全体で生きている。

パーマカルチャーについても同じことが言える。パーマカルチャリストは、暮らしに関係する全てをデザインの対象とするので、自分の能力を広範囲に渡り最大限発揮して生きる必要がある。しかし、それをどっちつかず、器用貧乏、などと評する人もいる。ビル・モリソンがパーマカルチャーを体系つけた時、専門家たちは激怒したらしい。農学と林学、林学と畜産学、建築学と生物学などを融合してとらえていたので、専門家としての自負を傷つけ



インディオも私たち日本人も、同じ人間です。

られたのだろう。しかし、専門家には見えないことが、全体の関係性を見据えることよってわかることもある。

### 文明はどうして絶滅する？

ここに二つの興味深い研究結果がある。

「ひとつは人類学で、もうひとつは生物学。それぞれの執筆者はお互いの内容についてまったく知らなかった：人類学者の方は、絶滅した種族について：生物学者の論文の方は、絶滅した生物種について、知られているすべての事例史を研究していた。つまりこのふたりの科学者は、絶滅の共通原因を追っていた：」

この研究者たちが発見したそれぞれの原因と、というのが、実は同じものであることが判明した。

ている。森に住んでいた動植物が絶滅して行くように、インディオも絶滅してしまっのか。

彼らは今、二つの選択肢のどちらかを選ぶ岐路に立たされている。①文明社会と隔絶した森の暮らしを守りながら絶滅して行くか、②文明社会と折り合いをつけながら生き残って行くか。彼らはこの二つの道のどちらかを選択するしかない。生き残ろうとするインディオたちは、新しい環境に適応しようとさまざまな試みを行っている。現金を使い始め、ポルトガル語やブラジルの社会事情を学び、自分たちの存在をアピールし、先住民ネットワークを作るためにインターネットを導入しようとしている。それらの試みは彼らの文明のある部分を壊して行くことになる。もう二度と、彼らの伝統的な暮らしに触れることが出来なくなるかも知れない。しかし、彼らの無垢な文明が変化して行くのを悲しむのは、現代文明人の身勝手な郷愁でしかない。なぜなら彼らを滅ぼそうとしているのは、そしてアマゾンの森を破壊しているのは、他

どちらも、絶滅は過度の専門分化の結果であると、結論を出していたのだ」(『宇宙船地球号操縦マニュアル』バックミンスター・フラー著、芹沢高志訳、ちくま学芸文庫より)

フラーは「過度に専門分化」した現代文明社会の持つ危うさを指摘し、もう一度人間が本来持っていた「包括的な能力」を取り戻すことが必要だと言っている。この「包括的な能力」とは、まさに先住民が持っている能力であり、パーマカルチャーの「森羅万象の関係をデザインし、自分の暮らしを立てる能力」と言ってもいいだろう。つまりただひとつの専門性、手段に依存して生きるのではなく、自分の能力を最大限に発揮し、多様な重層的な生き方をする。インディオの生き方はそのお手本だろう。しかし…。

### インディオも絶滅の道へ？

ふと考えることがある。「過度の専門分化」が種の絶滅の原因だとすると、インディオも絶滅することになるのではない

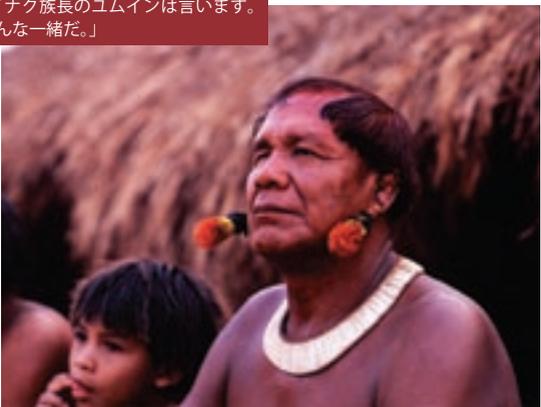
ならぬ私たちであるから。

アマゾンから得られる資源(木材、牛肉、大豆、鉱物等々)で日本人の暮らしは成り立っている。私たちの暮らしはアマゾンの森の一本一本の木の中のちを奪ってできている(これはアマゾンに限ったことでなく、他の地域についても言える)。

もし私たちの生活が自給自足したものであれば、アマゾンの森にもインディオにも迷惑をかけることはない。彼らを保護したり、支援したりするのはおこがましく、彼らに迷惑をかけるような暮らしを作ることが、まず私たちがしなければならぬこと。

2005年再びアマゾンを訪れ、森林伐採の拡大を目の当たりにし、私たちに残された時間はいよいよ少なくなってきた。危機感を体感した。イギリス気象局は数年前の予測で、2050年にはアマゾンは砂漠化すると言っている。この地球にサハラ砂漠の他にもうひとつの巨大な砂漠が誕生することになる。かつて

メイナク族長のユムインは言います。「みんな一緒だ。」



熱帯雨林だったサハラ砂漠がたどったと同じ歴史を今アマゾンがたどろうとしている。

### 生き残るために

ここで100年以上前に西洋人たちが書き残した文章を紹介する。

どうみても彼らは健康で幸福な民族であり、外国人などいなくてもよいのかもしれぬ。この民族は笑い上戸で心の底まで陽気である。誰の顔にも陽気な性格の特徴である幸福感、満足感、そして機嫌のよさがありありと現れていて、その場所の雰囲気にとったりと融けあう。彼らは何か目新しく素敵な眺めに出会うか、森や野原で物珍しいものを見つけてじっと感心して眺めているとき以外は、絶えずしゃべり続け、笑い続けている。

赤ん坊が泣き叫ぶのを聞くことはめつたになく、私はいままでのところ、母親が赤ん坊に対して痾癪を起しているのを一度も見えていない(彼ら(子供たち)にそそがれる愛情は、ただただ暖かさで平和で彼らを包み込み、その性格の悪いところを抑え、あらゆる良いところを伸ばすように思われます)。

子供は歩けるようになるたびに、弟や妹を背負うことをおぼえる。彼らはこういういでた

ちで遊び、走り、散歩する

ぼくが制作したメイナク族のドキュメントラリー・ビデオを見たあとこの文章を読みあげると、聞いた人は「ああメイナクの人びとは昔から同じような暮らしを続けてきているのだ。このまま変わらずこの暮らしを続けて行ってほしい」というような感想を持つ。しかし、実はこの文章はインディオのことを書いたものではない。100年以上前、つまり江戸時代末期の日本の一般民衆の姿を当時日本を訪れた西洋人が書き残した文章なのだ。現代日本人とは全く違う姿がかつてあったというこの事実を、私たちはどう受け止めれば良いのだろうか。100年前の日本の普通の人びとは、インディオのような「しあわせ」や「自然」と言う言葉を知らない世界に生きていたのではないか(実際に「自然」という言葉は「Nature」の翻訳語として明治以降入ってきた)。インディオの暮らしを見て、懐かしさを感じるのは当然である。自分自身のDNAに刻み込まれた暮らし



彼らは「自然」という言葉を知りません。

の暮らしを一人ひとりが目指すこと。その道筋を照らしてくれる一条の明かりがパーマカルチャーである。しかしパーマカルチャーはあくまでも道先案内に過ぎなかった。

て精神化・身体化してきた文化があったことを。その文化を「百姓」と呼ぶ。百姓とは農民のことではない。百の仕事とその仕事のあり様を支えた文化である。一人ひとりが多様な職能を持ち、それらの人びとが周りの環境と有機的につながりあって暮らしを作り上げていた重層的な文化。里山や里地を活躍の場としていた、それが百姓である。まさに農を基本とした自給自立の暮らしを体現していた

しを見ているのだから。この文章の引用元である『逝きし世の面影』(渡辺京二著、葦書房)という本を読むと、日本人が失ってしまった、忘れてしまったものの大きさに涙が出てきてしまう(そして、自分たちの祖先が培った素晴らしい文化にも)。

あの時代、それは仕方なかったのかも知れない。西洋列強の軍事力、経済力に対抗するため、日本は富国強兵、近代化という至上命令のもと、江戸文明とも言える洗練された有機的なあり様を捨てて行った。そして現在、インディオが物質文明の侵略に対抗するため、自文化を变质させながらも知識と技術を持って立ち上がろうとしている。生き残りをかけて。

### Hyakusho Culture の復権

明治維新に体験したそれまでの文化の喪失という経験をもとに、私たちがインディオの文化と共に生き残る道はないのだろうか。今、私たちにできること。ひとつの答えは、農を基本とした自給自立

人びと。

オーストラリア、ニュージーランドのパーマカルチャーリストたちが口々に言う「日本にあった素晴らしいパーマカルチャー」とは、まさにそのことなのだ。あえて言うなら、Hyakusho Culture。

明治維新、文明開化という近代化の名のもと、それ以前の百姓文化は「封建制度の中で自由もなく虐げられていた存在」として封印された。しかし、百数十年の時を経て、今百姓文化に光が当たっている。百姓はもつと自由で自立した存在だったと。日本人のDNAの中にはそのしたたかな百姓の記憶がしっかりと刻み込まれている。数世代前の先祖は皆、百姓だったのではないか。

私たちが目指すのは、輸入物のシステムの真似ではなく、自分のDNAに深く刻み込まれた百姓文化を覚醒させ、精神化・肉体化すること。その時、私たちはパーマカルチャーという言葉が必要としなくなり、日本のNative People(この世界とひとつになつて生きていくだろう。あのアマゾンの先住民のよう)。

# こころとアマゾンと パーマカルチャー

文 = 森谷めぐみ



## Profile

鍼灸師・ボディワーカー。ボディワークスペース「Wind of Life」を主宰。企業に10年間勤務し、退社後、鍼灸師免許取得。3年間臨床講座にて、からだを局所的ではなく全体としてとらえる経絡治療を学ぶ。同時に上記理論を実践する鍼灸師に師事。クレニオ・セイクルワーク（頭蓋仙骨療法）、内臓マニピュレーション、エナジェティック・オステオパシー、整体、鍼灸などのボディワークと、「大地」と「旅」から得た知恵を生かしたトータルな施術を行う。現在パートナーとふたり、治療をしなくても来た人が元気になっていく「暮らしの場」の実現に向けて準備中。ライフワークでもある気功、太極拳、ダンス、音楽などを通して身体感覚を取り戻すワークショップを企画している。

## パーマカルチャーを学んで

人もこの大自然の一部という思いを実感したくて、一年間安曇野でパーマカルチャーを学んだ。一年を終えて感じたことは、田舎に住んで農的暮らしをするのがパーマカルチャーではなかったことだ。場所は都会でも良い。まず自分を良く知り大切にすること。今いる場所で責任を持ってできるだけ循環が見える暮らしを楽しんで作ること。それが、私にと

らえたパーマカルチャーであった。

年が明け、ひよんなことから鍼灸師の仕事に加え、個人で映像制作を始めた主人の仕事を手伝うことになり、2005年4月、ブラジル・アマゾンの先住民保護区の村へ取材に行くことになった。

## 1500キロの道のりで見えたもの

ブラジルの首都、ブラジリアから車でインディオの村まで1500キロ。その

途中私たちが見たのは、道の両側に延々と続く、森林を伐採してできた途方もない数の牧場であった。それは保護区のすぐ隣まで及んでいる。森林伐採のスピードは年々早まり、以前伐採後は牧場に変わっていた森は、大豆畑に変わることが多くなったそうだ。

その大豆の行く先のひとつは私たちの住む日本だ。私たち日本人一人ひとりが、自分たちにとって必要不可欠な酸素を作りだすアマゾンの森を伐採している事実。そして私たちの社会は、アマゾンの森とそこに暮らす人びとを一方的に搾取することによって成り立っている。

伐採直後の森は泣いているように見えた。そして私の力に変えることができないくらい大きな問題にも思えた。でも果たして本当にそうなのだろうか。

アマゾンに限らず世界のあちこちで起きている環境破壊は、まぎれもなく、まず始めに私たち一人ひとりの内なる環境IIところが壊れてしまったことが最初の原因なのだろう。その後、外の環境破壊が進んだのだ。壊れてしまったところとは。そして、

## からだを使う

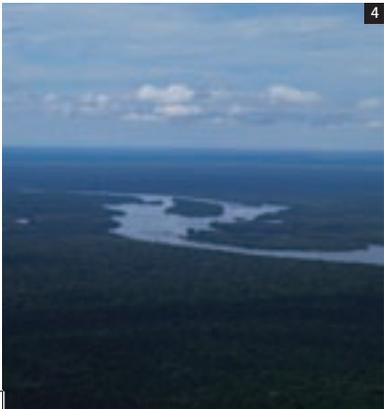
どうすればそれを取り戻すことができるのだろうか。その答えは、村での先住民の人びとの暮らしにあった。はならなかった。

私はそんな環境において、不思議とつらいという気持ちは起こらなかった。むしろ体力をぎりぎりまで使うことによって、からだのところは、どんどん元気になっていた。自分は思っている以上にタフで、いかに自分の能力を發揮せずに生きてきたかを感じさせてもらった。

からだを思いきり使い、電気もなくもちろんインターネットなどの情報源もないシンプルな生活は、迷いが生じる余地がない。その代わりに、普段聴こえない自分のこころの奥底の声が聴こえてきた。大事なことはそんな難しいことではなかった。「これで良いのだ」「こんな暮



1 陸稲の脱穀を手伝う 2 祭りの日の村の子どもたち 3 伐採直後の森 4 アマゾンの森



らしがしたい」。大地に根差したシンプルな暮らし。外からの声ではなく、自分の声をひとつひとつ確認していると、自分を信じることにつながっていった。

能力を100%発揮し、自分を信じて生きる村人は、我々現代人が抱えるストレス性の疾病や、肩こりや頭痛もない。彼らがすごいというよりも、これが人間本来の姿なのだ。

### 循環を感じる

私たちが村を訪れたのは乾期の始め。村中をたくさん美しい蝶が舞っている。そんな中で彼らの暮らしは営まれる。食べ物も、家や美しい工芸品の材料もみんな森や大地からいただく。自分たちから出たものは土へと還り、また自分たちに戻ってくる。いのちの巡りが目の前で見える暮らし。彼らは、大地を汚すことは自分自身を汚すことだと知っているのだ。そんな姿をみて、「美しい」という以外に言葉が見当たらなかった。全てが循環し、自分もその一部として生きる。このことは、私たちになんて大き

な安らぎを与えてくれるのだろうか。

### 感謝する

水ひとつとっても手に入れるのが困難な村では、一杯の水がとてもありがたく思えた。そして大切に使った。人はそんな環境にいると謙虚な気持ちが生まれてくるのではないか。少なくとも私はそうであった。この水も森がなくなれば飲めなくなってしまうのだ。水、森、私たちを生かしてくれる全ての環境に感謝の気持ちで湧いた。

### まず自分から

アマゾンから帰国した私たちは、自分たちの暮らしを立て直したいという思いが強くなった。今私たちが一番しなくてはならないのは、アマゾンの保護・援助よりも、まず始めに他でもない自分の暮らしを立て、これ以上アマゾンの森にご迷惑をかけないように自立することなのだ。自分たちで食べるものはなるべく自分たちで作ること。自分たちから出た物の

後始末をすること。私の友人はパーマカルチャーをして「うちの循環」と思ったが、まさに本質をついていると思う。私たちはマンション暮らしだが、ベランダに生ゴミコンポストを置いている。これを置き始めた時、小さなことだが確実に意識が変わった。自分たちから出たものに責任を持つことは、大きな一歩になるのではないか。排泄物の流れを見えなくしてしまった時代から、何か無責任な道を歩み始めたのではないだろうか。

しかし何ごとにもバランスが必要である。自分たちの行動に縛られ、苦しく楽しめなくなってしまうたら、それこそ本末転倒だろう。「自分を大切にすること」、これが一番大事なことだ。

小さな一人ひとりの責任ある一歩が、自分たちの内なる環境を取り戻し、地球の肺であり私たちの肺でもあるアマゾンの森を救い、そこに住む人びとに平和な暮らしをもたらすことを信じている。それには、私たちが学んだパーマカルチャー、そして日本古来の知恵や先住民の暮らしにヒントがかくされている。

# 共生社会への扉

文 = 伊藤英紀



### Profile

エコロジカル・コミュニティ研究。英国シューマツハカレッジにて、ヘレナ・ノーパーク・ホッジらより、地球生命系のしくみやエコロジカル社会のあり方などを学ぶ。ホリスティックサイエンス修士。エコロジカルな共生社会のあり方をテーマに、これからの社会のために一役を担いたいと考える企業や教育機関に対し、相談や支援を行っている。

## 真理が(ロゴス=ローグ)通じる(ダイア)

あの『スモール・イズ・ビューティフル』を書いた経済学者E・F・シューマツハにちなんで設立された、イギリスの小さな大学院に留学していた時、「目から鱗が落ちる」と言っているのことがかと思底実感した本がありました。それは量子力学の巨匠「デビッド・ボーム」が彼の晩年

に書いたものでした。その中でボームは、これからの社会の展望を語る中で、人間同士が行なう「対話=ダイアローグ」の重要性を強調しています。これは彼が晩年にもっとも力を入れた活動のひとつです。

「ダイアローグ」のダイアは「通じる」という意味を持ち、ローグは「ロゴスまたは真理」を意味します。つまり、お互いが公平な立場に立ち、情報をみんな

共有し、相互の意見に耳を傾けて対話を進めるならば、独りよがりや先入観が排除されるばかりでなく、ひとりでは到達し難い、よりふさわしい結論に至ることができるといえることです。ボームはまた「対話=ダイアローグ」は、私たちの社会があらゆる過ちを避けるための、もっとも優れた免疫機能としての役割を果たすであろうと述べています。

お互いの間で何かを決めなければならぬ場合には、まず相手の意見をしっかりと受け入れることからスタートします。自分の意見もきちんと主張するものの、相手の意見も自分の意見と同等に尊重しながら、お互いの合意点を探って行くことがそのプロセスとなります。

お互いが相互の意見を十分に尊重するならば、必ず合意に達します。しかも「対立」するよりずっと簡単に合意に至ることも可能です。「共生」とは、「お互いが存在することによってお互いが生かされている」ことを深く認識し、「自分の存在をしっかりと表現しながらも、他の存在も自分の存在と同等に尊重し、共に

全体への調和をとりながら生きていくことだと思っています。その意味において、この対話による合意形成は、人間社会はもちろん、人間と自然界における「共生」においても、もつとも基本となることと考えられます。

### 調和への対話には、小さな単位で

私たちが共生社会を目指すならば、社会の構造も自ずと変わって行くことになります。対話による合意を重視するためには、大きな集団では不可能です。より小さな小さなサイズの集団にならなければなりません。また、自分たちの活動が他の人びとや自然界に及ぼす影響に対して、しっかりと責任を負う必要があります。そのためにも、私たちの生活の主要な部分を、できるだけ自分の見える範囲で生産し、消費することが必要となります。社会のシステムも自己管理し、自己メンテナンスします。金融も自分たちでまかないます。教育もそうです。

を提供してくれるはずですが。地域の一人ひとり、そのコミュニティの中にある自分の場所を見つけて、コミュニティを支える大切な役割を担って行きます。そして、その自分の場所と役割は、周囲が移り変わっていくのと同じペースで、常に全体に調和しながら自らも変わって行きます。



Be Good Cafe 安曇野の参加者が一番印象に残った場面を草や花の汁で描いたものです

つまり、自分たちの、自分たちによる、自分たちのための、自分たちで納得し責任を負える社会を形成して行くことが大事になってきます。そして、それは意外と小さな地域レベルでの活動となるでしょう。これは昔の田舎にあったような閉鎖的なコミュニティのことではありません。また、どこかに理想郷をつくることでもありません。これからの共生社会への第一歩は、お互いの自由な意思を尊重しながら、今住んでいる地域のコミュニティを、相互の信頼と協調関係をベースに、より自立的なものに再構築していくことと考えられます。

### 対立する同士より、隣との協調から

それならば、一体何が具体的に変わってくるのでしょうか。例えば、協調が基本の共生のコミュニティでは、生産者と消費者、経営者と従業員、店員とお客といった相い対する関係よりも、それらが相互に融合した形が生まれてくるはず

### 個と全体の相乗進化

まさに自然界の原理と共通したしくみがここにあります。これこそ本当のエコロジカル社会と言ってもよいでしょう。一人ひとりの愛に満ちた小さな活動が集まれば、それがコミュニティの「質」を高めていきます。コミュニティの「質」が高まるとそれがまた一人ひとりの精神的、市民的意識を変えていきます。ここには、全体への調和を大事にする個人とコミュニティとの相互のフィードバックがあり、それが全体を共に進化させていきます。これは、私たちの母なる地球「ガイア」を創りあげてきた原理とまったく同じです。

実はこれらはもう絵空事ではありません。世界中の各地で、日本各地ですでにさまざまな形で実践が始まっています。消費者と農家が共同で経営する無農薬有機農業法人、コミュニティで作る信用組合、地域での財やサービスの交換システム、地域単位のエネルギー供給システム、車などの共同所有、地域全員の

です。その方が必要とされるニーズに合った、質の高い財やサービスを安定して供給できるからです。

また、個人が全てに所有権を主張することよりも、無駄をすることなく共有できるものは皆で持つというスタイルが多くなっていくでしょう。エネルギー資源の利用についても、それは地域で共同で自給自足することが多くなっていくはずです。このことは、必要なものを必要なだけ消費するといった、新しいライフスタイルをも生み出します。

また、長い年月の間に築きあげられた伝統的な地域の文化も、貴重な知恵の宝庫として見直されてきます。財やサービスの交換も自分たちで管理する交換システムの中で行なわれるようになります。子どもの教育も、大規模な画一的なものから、地域の文化と個人の特質、精神的・身体的な発達に合わせた教育を可能とする、地域に支えられた小規模な学校が増えてきます。協調を主体にした共生のコミュニティは、私たちの社会に豊かな多様性を育み、愛に満ちた生活の場

合意を前提とする地方、地域で建てた小学校等のさまざまな取り組みが、世界中で同時多発的に起こっています。

そこでは実際新しい人間関係、自然界との関係が生まれ、コミュニティ自体も変わりつつあります。これらは、まさに地球規模での変容を実感させるべきことです。嬉しいことに、その変容への扉はあなたの前にも開かれています。そして、あなたが望みさえすれば、この新しい共生の世界にいつでも参加できるので、シューマッハやボームをはじめ、多くの偉大な先人たちが描いてきた夢が、今、現実に動き出しているのです。



追伸 ヘレナ・ノーバーク・ホッジさんはシューマッハハカレッジの近所に住んでいて、学校にもよく来ていろいろと教えてくれました。まさに時空を超えた真理(愛)に触れているかのような人でした。個人的に私の研究を見てくれた懐かしい人です。ここでまた一緒で書いてこれまた嬉しいです。

# そろそろ祭りを抜け出して、帰ろう

文 = おおひらしんすけ  
syn@mindresort

## Profile

1968年大阪府生まれ。パーマカルチャーリスト修行中、ロハス系IT屋。スローライフ支援&コミュニティ「マインドリゾート」運営 (<http://www.mindresort.net/>)。臨機応変、NO MUSIC NO LIFE、祭&旅、太陽&裸足。自分たちの生活にも健康な土と循環を取り戻してキモチヨクしよう！



人が生き延び得る環境としての歴史的大前提となつていのが、食料を生産できる土地ということになつてい。そして都市は市場から始まつて、膨張し、減んできてい。うしい。

食料を生産できる土地に家があり、そこがいわゆる田舎的なすみかとしてのコミュニティがある。都市とは「祭り」が執り行われている場所・コミュニティということが民俗学的に言われているということだ。これはパーマカルチャー・センター・ジャパンの設立さんから聞いた話。

そう、都市とは「祭り」状態。これ非常に納得した。

我々は毎日毎日、祭りを繰り返して生きてい。るのだ。しかし、祭りが日常になつてしまつたので、それが祭りであることさえ気づかない。でもそう言われてみればそうだろう。店がたくさん立ち並び、いろんな場所で興行が行われ、人はお金を持つてい。るんなものを消費する。そして宴会をして、一喜一憂するよ。うな事柄も多い。広告に目ざとく、よりエキサイティングなものを探し歩く。

さあ、そろそろ楽しい祭りを後にして、お

ちに帰ろう。また次の祭りを楽しみにして……。と、なつた時に僕にはすでに帰る場所さえないことに気づいた。

祭りの最中に生まれて、そこで育ち、オトナになつて、しかし、まだ祭りの最中で一喜一憂しているオメダタイ人生を送つてい。る。

都市的生活＝市場経済上の生活を祭りに例えると、自分の帰る場所が何なのかよくわかつてくる。そう、祭りのやつてない「家」があるところだ。そこでは地域で食料を生産してい。る。そんな場所だ。はたして日本にまだ帰る場所が残つてい。るんだらうか。

グローバルゼーションは地球全体で祭りを開催しようとしてい。る。どこか、祭りをしな。いところはないか、いつも探してい。るよつだ。田舎に行つても今や小さい祭りだらけ。そう、みんなお祭り大好きだから。

地味な生活よりも祭りだ、祭り。つて感じ。しかし、悲劇的なことに、帰る場所のなくなつた人がたくさん都市にい。る。そもそも祭りの最中で生まれてい。るんだもの。

当たり前だ。

では、祭りを抜け出すつて、抜け出す感覚つて？

おそらく、山にパーティ(祭り)行つて、踊るだけ踊つて、いろんなことになつて、そして昼頃にやつとの思いでへとへとになつてテントに帰つて行くあの感覚。CHILL OUTな感覚だと思つ。

テントには先に帰つて来ている友だちが超スマイルで出迎えてくれる。「お帰り！」つて言つて、チャイでも飲むんだらう。

そうだよ、そろそろ帰らう。

思い出してみよう。

自分のテントを探して帰つてみよう。そしてハンモックに転がり込み、空を見上げてみよう。

あーナイスな祭りだった——！つて。そしてその日の晩ご飯は、仲間や家族で作つたご飯を食べ、そう、時間の制限のない日常へと帰る。

時間は分刻みから季節刻みへと変わり、夜型から朝型に変わり、買うことをやめ、作り出す。そこは自分たちの家だから。

このCHILL OUTな感覚は、まさにロハスであり、終わりのある祭りを抜け出すことが、盲目的なストレスからの解放と、自己回帰につながる。誰もが皆やりたいことだ。

そう、みんなそろそろ帰りたいんだらう？

しかし祭りを謳歌してい。る人はそれでいい。十分に楽しめばいい。

でもあまり長く楽しんでい。ると、楽しみが楽しみだと気づかなくなるから、たまには帰れ。

帰る場所のある人はよりしあわせだ。帰る場所のない人は探せ。

きつとどこかにまだ「場所」はあると思つ。そしてきつとまたいつか、祭りを楽しめばいい。うまくそれを繰り返せばいい。祭りだけに傾いてい。る人生だからストレスになるのだ。

ふと、後ろに歩き出してい。けばいい。人をかき分け突き進む。目を合わす必要はない。そ

してだんだん人がいなくなつてくると、だんだんと幸せそうに、まったりとお茶を飲んでいるような人が点々と現れてくる。みんなのスマイルにちょっと照れながら歩く。そう、長い間「アガリ過ぎた」の恥ずかしさだ。でもそんなことはみんなもさつたつたので別に

恥ずかしがることはない。

どこでもいい、スマイルのあるところに入つて行つて、「ただいま！」と言おう。

「さつきそこで摘んできたよもぎで作つたよもぎ茶だよ。飲むだらう？」

「あ、はい。いただきます」

「祭りはどうだった？」

「あーはい……いや、楽しかったですよ」

「まあ、3日くらいゆっくり寝て、今度の彼岸には収穫があるから手伝つておくれ」

「あー、そろそろ夜冷えるから、温泉でよくあつたまれよ」

「はー……」

「あの、ここは僕の家ですか？」

「あそここの丘にでも家、自分でつくれえ」

「それまでは居てもいいから」

泥だらけのスボンと靴を早く脱ぎたいだらう？だからこんなことがパーマカルチャーな理由だ。

田舎暮らしとかスローライフではない。本当の家、帰ることのできる場所づくりが、きつとパーマカルチャーだと思つわけです。